kindokpr ess.com
www.kindokpr ess.com

続地球温暖化の果てに　第一部

# 列島首都沈没

生野以久男

# プロローグのプロローグ

かれ直面するものあり、日本はまさに世界の未来の縮図だった。

地球温暖化の果てに、日本列島は高温海水に取り囲まれて「熱水列島」となった。やがて列島全体がヒートアイランド化し、日本列島が地球のヒートアイランドとなってしまった。

ヒートアイランド日本列島には、熱波、干害、大雨、超巨大台風、巨大竜巻など、毎年超異常気象が襲い、日本列島は「焦熱列島」、そして「狂風雨震列島」と化していった。

だが日本列島を襲った気候大変動は異常気象や気候異変だけではなかった。地球上の熱分配が狂いだし、ついに、大気の大循環が乱れ、海洋の大循環（熱塩循環）も衰退しだした。地球上の熱配分の基本システムである大気や海洋の大循環の乱れがついに地球の自転に影響をおよぼし、地球内部のマントルの流動を変動させていく。

地球温暖化が地球システム全体を大きく揺るがしはじめたのだ。地球の地殻構造が影響を受け、日本列島周辺の地殻構造をも揺るぎ出した。

日本列島の下には太平洋プレートやフィリピン海プレートなどいくつものプレートが潜り込み、日本列島付近の地殻構造は複雑に入り組んでいるが、首都圏のある関東平野が乗っている地殻構造はとくに複雑だった。

首都圏一帯の関東平野で緩慢な沈下現象が発生しする。

首都圏のゼロメートル地帯が水没し、一帯で物流が滞り、そこに住む二〇〇万人が飢えに襲われ、疫病が蔓延する。避難民が各地に散り、これとともに、飢餓や疫病が広がり、日本列島が「飢餓疫病列島」となった。

このような日本列島の状況は、地球温暖化の果てに世界各国が遅かれ早

# プロローグ

地球温暖化の果てに、日本列島は「熱水列島」「焦熱列島」「狂風雨震列島」「飢餓疫病列島」と化し、住民を翻弄しつづけた。だがこれで終りではなかった。

地球温暖化が終局を迎えるまでの道のりはさらに長く、このような気候異変は何年何十年何百年もつづき、食糧不足や感染症の危険にも襲われつづけた末に、ようやく地球温暖化が緩和して、次第に寒冷化への道を辿りはじめることになる。だがその過程は決して平穏なものではない。

日本列島は、地球温暖化の果てに、新たな局面を迎えつつあった。

地球表面はいくつかのプレート（地殻の岩盤）で覆われているが、日本列島の前（東側）に横たわる海溝付近ではいくつものプレートが寄りあい複雑な地殻構造を形成している。ことに関東平野が乗っている地殻の地中構造はとくに複雑だった。

得体の知れない微震動が頻発し、首都圏一帯に沈下地震のはじまり、年数センチメートルの速度で進む（東京沈下）。河川堤防や防潮堤に亀裂がはしり、やがて決壊し、首都圏のゼロメートル地帯は水没してしまった。

二〇〇万人におよぶ被災者はゼロメートル地帯から水没を免れた隣接地域に移り、新設された避難テント村に収容され、テント生活を余儀なくされた。

地盤沈下によって水道や電気などのライフラインの損壊、交通機関の運休、道路の損壊などさまざまな障害が発生した。物流は途絶えがちで、食料品やトイレットペーパーなどの日用品が極力不足し、飢えが忍びよう一方、テント村の衛生状態が悪化し、各種の疫病が蔓延しだす。

テント村を抜け出し、地方へ移住を試みる被災者が続出するが、受け入れ市町村とのトラブルから移住が進まず、国は北海道へ避難民の集団移住を図る。だが避難民の集団移住は成功せず、飢えを広め、疫病を蔓延させるだけだった。

水没を免れた首都圏一帯には前途に不安を抱きながらも未だ四〇〇〇万人に近い住民が残っていた。だが国は集団移住の惨憺たる結果に戸惑い、住民の移住には積極的な対策を講ずることなく、自主的な移住を促す策に出ていた。

幸い、東京沈下は緩慢に進み、大沈下を起すことなく五年が経過した。その間、約半数の住民が首都圏を離れ、地方へ移住していったものの、未だ二〇〇〇万人の住民が留まっていた。

首都圏に大沈下のときが刻々と迫っていた。いよいよ残っている人びとにも決断すべき時が迫っていた。

# 第一章

## 1

「いままでどうしておられたのですか」

佐藤由紀夫は九鬼陽一郎であることを確認すると、一気に詰問調になった。

「佐藤くんか。お元気……」

のんびりした九鬼の声が返ってきた。

「何度電話しても繋がらなくて……。一体、なにをしていたんですか」

彼は「元気なんかじゃないよ」とこころのなかで呟きながら、ようやく繋がった九鬼を離すまいと構える。受話器を左手に持ち変えると、机の上にメモ帳を開いた。九鬼にどうしても聞いておきたいことがあるのだ。

九鬼陽一郎が大学の研究室から不意に姿を消したのは、五年前のことだった。毎日のように研究室に入り浸り、小柄な身体をソファの中央に乗せ、大声を出して言い合っていた彼にも一言もなかった。

しばらくして、九鬼から絵はがきがM新聞社宛に届き、彼は九鬼が米国の研究機関であるＡＣＡＲへ移ったことを知った。彼はまえに九鬼がその年の三月一杯で大学を辞めると聞いていた。だが、そのまえに研究活動を放擲して日本を飛びだすとは思ってもみなかった。

彼はロッキー山脈を背景に立つＡＣＡＲの絵はがきを見ながら、「気候変動予測研究は止めると言っていたではないか」と何度も呟いた。ＡＣＡＲへ行ったとは知らずに、彼は研究室へ何度も足を運び、九鬼の行方を訊ねていただけに、なぜか裏切られてような気分に襲われ、その痛手からなかなか立ち直れずにいた。

だが考えてみると、愛妻を奪われ、恩師であり義兄でもある佐々木教授を失い、そしてまた新らたなパートナーの佐橋祐子にも逝かれてしまい、日本に留まることは九鬼にとって辛いことにちがいなかった。それにしても幼いアキラを残して、なぜ沈下する東京から急に飛び立つ気になったのか。

「地球全体モデルに挑戦していたのだよ」

「予測研究は止めるんじゃなかったんですか……」

佐藤は自分でもなぜこんなことを言い出したのか分からなかった。「沈下する首都圏の四〇〇〇万人を救うための実践活動をするんじゃなかったのか」と糺したかった。

「業だね。研究を止めるわけにいかないのだよ」

「業？　予測研究をすることが先生にとって宿命だとでもいうのですか……」

佐藤には九鬼がなぜそう考えるようになったのか分からなかった。まさか愛する人を矢継ぎ早に奪われたので気が変わり、仇討ちをしようとしているのだろうか。それとも自分の使命だったのだとあらためて気付いたとでもいうのだろうか。

だがそんな詮索はいまはどうでもよかった。いまは一刻も早く新しいモデルの開発状況とそのモデルによる東京沈下の予測結果を知りたかった。彼には五年経ってもいまだに沈下区域に残っている二〇〇〇万人を超える住民たちの存在が気になって仕方がなかった。

「……」

九鬼はなぜか黙ったままだ。
「それでうまくいっているのですか、そちらでの研究は……」
彼はせっつく。
「ああ……」
九鬼の声は相変らずのんびりしている。
「あれから五年が過ぎているのに、思ったほど東京の沈降が進んでいない。そのモデルでの予測では今後どうなるのですかね」
「本格的な予測計算はまだだが……」
「そんなのんきなことを……、今後どうなるか、いますぐ教えてください。こちらにとっては死活問題なんですよ」
「うん、分かっている」
「ゼロメートル地帯は水没したままだけど、ゼロメートル地帯以外のまだ水没していないところでも低層ビルや一般住宅には傾いたり、壁に亀裂が走っているのは見られるようになってきている。まだ、倒壊といった酷い被害が出ていないけれど……。まあ、一見したところ、あまり変わりがないようにも見えるが、道路のアスファルトには亀裂や波打ちなどもできている。もしかしたら、このまま収束するのではないかという気配さえ感じることもあるけど、その可能性があるのかどうか。とにかく、これからどんなふうな展開が予測されるか是非知っておきたいのですよ……」
「沈降が思ったほど進んでいないとすると、まだ避難せずにそのまま留まっている住民がかなりいるのでしょうね、首都圏には……」
「そのとおりですよ。先生が懸念していた通りです」
「それは大変なことになる。なんでも、米軍はすでに全基地の移転を完了したそうだが……」
米軍は東京沈下をいち早く感知し、沈下地域にある米軍基地の事前移転を準備していたのだ。
「これまでここを離れた住民数は多く見積もっても住民全体の半分程度じゃないのかな。もっと多いかどうか、正確なところは分からない。政府はデータを出したがらないんだよ。国際的な評判や風評を気にしているらしい。まだ多くの人びとが沈み行く大地にへばりついている状態ですね」
一時、水道が断水したり、停電がつづいて、生活条件が著しく悪化したが、政府や東京都などの各自治体が取りあえず応急措置を講じる方針にでたことが功を奏したのか、いまのところ、それ以上拡大することもなく、ライフラインの悪化は収まっていた。
それに自然エネルギーの利用が進んでおり、太陽発電や風力発電などの分散型発電が大いに役立った。また水不足には井戸が掘られた。なぜか東京沈下がはじまってから、どこを掘っても水が出るのだ。
とにかく、東京沈下速度が緩慢なことが幸いしたのだ。ゼロメートル地帯の被災者避難の失敗体験から、政府は避難の強行を極力避け、東京都など沈下地元自治体は地方の自治体と連携し、避難民受け入れの県や市町村に対して補助金を提供するなどして避難推進を図った。これで住民たちも時間をかけて避難先を選び、自主的に避難することができたのだった。
また、不足していた食料品の搬入も、以前と比べようもないが、まがりなりにもそこそこに回復していたのだ。
「新聞やテレビでは傾きだしている高層ビルや倒壊した超高層マンションの映像が放映されているけど、政府や東京都はもっと積極的にやるべきじゃないのか。半数としても、まだ二〇〇〇万人の住民が残っているんだろう。一体なにをやっているの……」

九鬼の声に苛立ちが感じられた。

「いや、行政サイドは新都市建設や移住先の確保など対策をはじめているけどね。でも沈下速度が緩慢なことをいいことにして、ひたすら時間稼ぎをしているといった感じだ。ゼロメートル地帯の避難民をテント村に収容しようとしてひどい目にあっているので、自主的に避難してくれることを奨励している。といっても、自宅にへばり付いて離れようとしない住民に対してまで積極的に奨励しているとは思えない。むしろ、自宅待機も止むを得ないといった感じなんだ。もし、このまま東京沈下が収束することになれば、政府も住民も万万歳といったところだろう」

ゼロメートル地帯の二〇〇万人の避難で大混乱を招いたことから、その二〇倍の四〇〇〇万人の避難民を沈下地域から移動させることは簡単にできることではなかったのだ。政府の無策は時間をかけてゆっくり避難民が全国へ散っていく方策を採用したということらしい。

「時間稼ぎになればいいが……」

「近くに、新首都をはじめ、いくつかの新都市を建設しはじめているんですが、思うように進んでいない。全国の市町村にも避難民受け入れの住宅団地建設を促しているが、これも遅々として進まない。これらが完成すれば自宅にへばり付いている避難民の移住をはじめるつもりなんだろうけど、何時完成するやら……」

「財政出動して公共事業を進めているわけか。全くムダなことだ」

「おかしくなった経済の建て直しのための景気浮揚策として住宅建設ということでしょうね」

「バカな。円安で資材や原料輸入もままならないだろうに、これではやがて超インフレだろう」

「そんなところなんです」

「大体、企業対策には熱心だが、そんなことをやっていては避難民の救済は間に合わない。それにこれまでの経済システムではこれから日本列島に襲い来る異変に対応できないだろう」

「すると、近々、本格的な東京沈下がはじまるということですか。そのあとにもつぎつぎと新しい異変が襲ってくるというのですか。いつですか、そしてそれは一体なんですか……」

記者のカンから九鬼の心配を感じ取ったのだった。九鬼はしばらく無言でいた。彼がもう一度訊ねようとしたとき、受話器の奥から声がした。

「いつとは言い難いが……、本格的沈下は遠からず、必ずはじまる。前後して海が襲ってくるだろう」

九鬼はつづけてこんなことを言った。

いま沈下しているところにすでにその兆候が現れるはずだ。注意深く観察すれば、必ず見付かる。よく注意して兆候を探すことだ。兆候があれば、本格的な東京沈下が間近いのだ。

「兆候？」

「たとえば、一部だけが激しく沈下しているとか、あるいは沈下が連続して進んでいるところがあるとかだ。すぐ分かるだろう。周りから見て、異常なところがあれば、それがそうだ」

「異常なところを探せばいいんだな。で、それからどんなふうになっていくと考えられるんですか、東京が……」

「多分、海中深く沈んでいくことになるだろう」

「兆候が現れてから、沈没するまでどのくらい……」

「分からない。だが思ったより速いかも知れない。それは……」

九鬼はつづける。
東京一帯が乗っている岩盤の「破片」は太平洋プレートに支えられている状態にあるが、異常な兆候はその状態に異変が生じたことを示しているのだ。「破片」が太平洋プレートの支えを失えば、急激に沈下しはじめるだろう。さらに不等沈下が生ずれば、地滑りの恐れがある。東京一帯を乗せた表層部分に地滑りが起こると、列島首都東京は一瞬のうちに、日本海溝へ向って滑り落ちていくことになるかもしれない。
「……」
兆候が現れれば、一刻の猶予もないということか。彼は背筋が凍るような戦慄を覚えた。
「だが問題は……、日本列島を襲う異変は東京沈下で終わらないということだ……」
九鬼の低い声が響く。
地球温暖化は単に気温が上昇するだけではないのだ。地球温暖化をもたらす気候変動は気候システムの撹乱だが、これだけでは収まらない。大気システムや海洋システムの撹乱を通して、さらに、地殻やプレート、マントルの動きなど、地球内部のシステムにも影響をおよぼす。地球温暖化は気候システムといった地球表面のシステムだけでなく、地球のそのほかのシステムをも撹乱するものだった。
気候システムといった地球表面のシステムといえども、地球全体システムの一部を構成するものである以上、個々のシステムの撹乱が全体システムを構成する他のシステムにも影響をおよぼしていく。そして個々の撹乱が全体の撹乱を呼び起こしていくことになるのだ。
「すると、これからはじまる地球システム大撹乱のなかで、日本列島にはさらなる試練が待ち構えているというのですか。地球温暖化の果てに生じた東京沈下で撹乱が終りではなかったのすか」
「終りだと思っていた。だがいくつものプレートが集中し、地殻の過敏な地震帯に位置する日本列島はそれでは済まなかった。だから、四〇〇〇万人の避難民の救済対策も将来の異変をも十分考慮して行なわなければ、かえって大きな混乱を招き、被害を大きくすることになるだろう」
「……」
佐藤は聞いていなかった。
いまの東京沈下でさえ、日本という国の息の根を止めることになると思うのに、このあとになにが襲ってくるというのだ。地球温暖化の果てに、なぜつぎつぎに大異変が日本列島を襲うのか。もういい加減にしてくれ。一体、地球は日本がなにをしたというのだ。
彼は受話器をもっていることも忘れて、呆然と立ちつくしていた。しばらくして、受話器に気付き、ふたたび耳にもっていったが、電話はすでに切れているらしく九鬼の声はなかった。
おもむろに受話器を返すと、彼は意を決して立ち上がった。

## 2

東京沈下がはじまって以来、五年を経たいま、沈下都市部、ことに東京都心部の人口減少が著しく、首都圏の様相はすっかり変わってしまった。
関東平野の沈下境界に生じた東西と南北のほぼ一〇〇キロにわたる亀裂が拡大して次第に姿が露になった。沈下範囲が明らかになったものの、境

界周辺にも大小の新たな亀裂が幾条にも走り出していた。

これらの亀裂の上には首都圏に進入する高速自動車道や主要国道に沿って仮設橋梁が掛けられ、沈下する首都圏への物資の陸上輸送路の確保が図られた。また、これは住民の地方への移動や物品の運送にも欠かせないものであった。

沈下区域を流れる殆どの河川が干上がってしまった。流水は沈下境界の東西と南北の方向に生じた深い亀裂に流れ込んでいるらしく、大雨時以外は河川の川底がからからに乾いてしまい、道路代わりになった。

住民の水がめとして建設されたダム湖も決壊の危険から放水され、いまでは底まで空っぽになり、水没した集落の残骸が顔を出している。

都心では車が消え、人影も疎らになった。地下駅や地下鉄には浸水が溢れ、線路は殆どが水没したままだった。なかにはホームまで水が溢れているところがあった。

郊外から都心へ入る各鉄道も高架橋や線路に高低差ができ、メンテナンスに手間がかかり、早々に運行不能に陥った。ＪＲ環状線も同様だった。

道路の破損も酷かったが、ほかに交通手段がないため、トラックによる物流確保のために主要幹線道路の補修がつづけられた。といっても、道路には凹凸や亀裂があり、ときおり通るトラックやタクシーは用心深く速度を落として走り抜けていく。

一時は狂乱状態に陥り、暴力や麻薬が横行し、無法地帯と化した盛り場もいつの間にか看板は破れ、ネオンも消え、ゴーストタウンとなった。盛り場周辺の街灯は投石の標的なって壊され、夜になるとビル街は真っ暗な闇に閉ざされてしまう。ときおり、痩せ細った野良猫が獲物を求めて彷徨うはか、全く人気がなかった

山の手の住宅街では、ある日、一軒が引っ越してしばらくするとその隣が越すといった具合で、まるで歯が抜けるように住民が減っていった。時が経つにつれ、空家が目立ち、空き巣や強盗が頻発した。夜には徒党を組んだ黒ずくめの集団が横行し、商店の襲撃や強姦・殺人・放火が日常茶飯事となった。これに対抗して自警団による夜警が行なわれるようになったが、街に残っているのは老人たちばかりで黒い集団の起動力には追いつかなかった。

ゴミの収集が滞り、悪臭が満ち、ハエや蚊が発生した。野良犬や野良猫がゴミをあさり、散らかしていく。餌となる食べものはなく、痩せ細り、死んでいった。放置されたペットは犬や猫だけではなかった。ウサギやモルモット、蛇やトカゲ、アライグマやカミツキガメなどさまざまな生き物が放置され、弱い動物は強い動物に食べられてしまった。野犬化した犬は群れをつくって人間まで襲うようになった。

一年目はさほどでなかったが、二年経ち、三年目に入ったころから、街全体が急速に活気を失い、寂れていった。

いくら待っても、東京沈下が収まりそうにないことが分かったのか、それとも超高層マンションの倒壊や高層ビルの外壁剥離や傾きが見られるようになったことも大きかったが、政府や東京都が地方への移住を促し、必要な資金の貸与や奨励金を出すようになって一段と加速されたのだった。

一方、郊外での住民の動きは鈍かった。ことに戸建てに住む老齢の人びとは腰が重かった。長年住み慣れた土地を離れたがらないのだ。老い先短ければなおのことだっだし、年金生活者に移住資金はなかった。

いままでと違い、いつ止まるか分からないライフラインの心配はあった。だが地下水位が上昇しているのか、水はどこを掘っても出てくる。送電が

止まっても太陽発電があった。ただ食料品が不足がちだった。
農家は相変らず農地を耕しつづけた。一般の住民も狭い庭を家庭菜園にして手に入りにくくなった生鮮野菜を確保し、生活を維持しようとした。
次第に、治安や行政サービスが低下していく。スーパーやコンビニ、レストランや飲み屋、工場や事務所等の閉鎖が相次ぎ、働き場所も少なくなった。
街は活気を失い、失業者やホームレスが増え、空き巣やかっぱらいが日常的になっていく。
沈下区域の住民に対して、行政は地方への移住を積極的に誘導しながらも、政府も東京都も他の県も沈下現象について確定的な見通しを避けていた。というより、沈下現象が永続し、やがて海中へ没するとは決して言わず、むしろ、いずれ収束するといったニュアンスさえ匂わせていた。
いたずらに不安を煽れば、四〇〇〇万人の暴動による社会混乱を招きかねないとの政治的な判断から取られた措置といわれていたが、これといった対策が考えつかず、ただゼロメートル地帯の二〇〇万人の避難の二の舞いになることを恐れ、もっぱら時間稼ぎをしていたに過ぎなかった。これまでの五年間が猶予期間となって、避難民の自主的な地方への移住が進み、首都圏の人口の急減を見たのだった。だがそれでもいまだに二〇〇〇万人を超える住民が沈下区域に残っていたのだ。

3

三階から階段を駆け下り、エントランスホールに出る。いつもなら引っ切りなしに人が行き交っているのに、人影はなかった。守衛がひとり、開いたままになっているガラス扉のそばに立ち、手持ちぶたさに辺りをきょろきょろ見回している。
佐藤は広いホールを横切り、守衛の横を通り抜け、外へ出た。
「痛い……」
四月になったばかりなのに、強烈な太陽が頭を射した。このところ天候が不順で、春のなかに夏が紛れ込むかと思えば、一変して気温が低下し、冷え込むことがあった。
一瞬、佐藤は眩暈を感じ、足を止めた。
道路より一段と高いところにある本社ビルのエントランスに通じる階段が前面に延び、その先に片側三車線の幹線道路が横に走っている。いつもなら、数珠繋ぎになって走る車と引きも切らない走行音に満ち、昼時ともなれば道路の両側の歩道には行き交うワイシャツ姿や制服姿のオフィス勤めの男女で溢れているのに、目の前には、車はおろか人影すらなかった。ただ間延びした空間が広がっているだけだった。
彼は歩道の端で立ち止まり、左右を確かめて、道路を横切る。車が来ないのは分かっているが、どうしても立ち止まって左右を見てしまう。
M新聞本社ビルは横に長い古い低層のビルで、超高層ビルの立ち並ぶ都心のオフィス街にあった。多くのオフィスビルには殆ど人影はない。大企業のオフィスは留守番を残して、いち早く移転を了えていた、
彼は超高層ビルを見上げ、傾き加減を確かめながら、オフィス街を足早に通り過ぎ、公園のなかへ入っていく。その先に国の各省庁のビルが集まる官庁街があった。
省庁のビルも高層化するとともに、各省庁がそれぞれビルをもつことも

なくなって、いくつかの省庁が合同で使用する巨大なビルが建設されていた。だが見かけはひとつのビルでもなかがいくつにも仕切られ、訪れる者には迷路に嵌り込んだような雰囲気があった。

「ここはホントに分かりにくいところだ」

佐藤の第一声はいつも決まっていた。

「なにもわざわざ来なくてもいい。電話してくれ。オレも忙しいんだ」

斉木治郎は机のまえに無造作に椅子を寄せて座り込み、額の汗を拭っている佐藤を鋭い視線で一瞥すると、手元に広げている書類に目を落とす。

「新首都へいつ引越すんだ。もう建物はできているんだろ。早くしたほうがいい。東京大沈下は近いぞ。いよいよ来るぞ、凄いのが……」

斉木が書類から顔を上げると、彼はニヤッとした。

髪は短く切っているがぼさぼさ頭だ。目付きは鋭く、顔全体が引き締まって尖っている感じだ。鼻筋が通り、いかにも官僚らしい顔付きだ、と言いたいところだが、これは官僚の顔付きじゃない。むしろ、利に聡い顔だった。斉木と比べれば、むしろ、小柄だが、きりりとした感じの佐藤の顔付きほうが官僚タイプだった。高校と大学が同期で、斉木も新聞記者志望であった。だがどこでどう間違ったのか、いまは斉木がK省の課長で、彼はM新聞の科学部記者だった。

「どこで仕入れてきた、そのネタは……」

斉木が見下したように言う。斉木は大男だが、佐藤は小柄で、顔も小作りだ。

「お宅の先生たちのご託宣はどうなんだ……」

斉木の課では地震に関する評価を行なう委員会（評価委員会）の事務局を担当していた。委員会は専門家で構成され、毎月集まり、大学や各調査研究機関から集められたデータをもとに、今後発生する地震について専門的な評価を行なっているのだ。

一瞬、斉木が嫌な顔をした。だが彼はつづける。

「……大勢の専門家が集まればいいというもんじゃないだろ。『文殊の知恵』どころが、なかなか意見が纏まらない『烏合の衆』で、そのうえ、無責任になりがちじゃないのか。まあ、結局、無難な評価しかできないだろうな。ことに、東京沈下のようなケースでは誰も責任を取りたがらない……」

「あの文章を書いたド素人先生がそう言っているのか」

斉木は以前M紙に掲載された東京沈下に関する九鬼論文のことをいっているらしい。彼はかまわずつづける。

「……現に、進行中の東京沈下現象に対して、なぜ、曖昧な評価しかできないんだ。みんなが納得するように、莫大な金をかけて大量のデータを集めているが、事前に予測できなければムダになるんじゃないのか」

「いますぐそれができなくとも、そのうちできるようになる」

「そのうちね……。四〇〇〇万人を人質にしていい気なもんだ」

「バカ言え。二〇〇〇万だ……」

「二〇〇〇万人は政府の対策に愛想を尽かして自主的に逃げ出したくちだ。彼らもかっては人質だった」

「まだ、先生も頑張っている……」

「先生？」

「『白頭大人』だよ」

「え？　どこに……」

白頭大人はふたりが大学時代に薫陶を受けた恩師だった。といっても、

別に講義を聴いていたわけではなかった。二人は暇があると、ドアをいつも開放しているサロンのような白頭研究室に入り浸っていた白頭大人を取り巻く常連だったにすぎない。中国の古事や雑学の大家で、角張った顔に人を引き付ける丸い目の白頭大人はまだ定年に間があったが、若いころから頭髪が真っ白だったので、誰が言うことなしに、いつの間にか敬意を込めて「白頭大人」と呼ぶようになった。

「奥多摩にいるという話だ」

「そんなとこでなにしているんだ」

「自給自足を実践しているらしい。一度、取材に行ってみたらどうだ」

「うん……。こんな話をするつもりではなかった。沈下の観測データを見たいんだ。大沈下の兆候が出ていないかチェックしたいのだ」

「兆候？　なんの兆候だ」

「もちろん、東京大沈下に決まっているだろ」

「ふん、観測データから分かるのか……」

「もちろん、兆候があれば……」

「ふーん、じゃ、特別見せてやるか。だがタダじゃないぞ」

斉木は隣の課長補佐に声をかけ、データを持ってこさせ、データシートの分厚い綴りを彼のまえに突きだす。

「整理してないのか」

彼はぶつぶつ言いながら、データシートを捲りだす。

「課長、いまプリントアウトしたものですが……」

課長補佐が一枚の図面を手渡す。沈下地域の地図のうえに沈下度合を濃淡で表示してあった。

「どれどれ……」

彼は手を伸ばし、斉木から図面を奪う。彼はよく見ようと図面に顔を近づけたとき、斉木の手が伸びてきて図面と取り上げる。

「これじゃ、データシートと照合しなければよく分からん。それをもって、会議室へ行こう」

斉木は図面を持って、大股でドアのほうへ歩き出した。彼は机に広げたデータシートの分厚い綴りを閉じて小脇に抱え、背の高い斉木のあとを追った。

## 4

「ところで、兆候ってなんだ……」

「異常沈下箇所だ。この辺が怪しいな」

「それと大沈下がどう関係するんだ……」

「その前兆ということだ」

「異常沈下が見付かれば、大沈下が近いというのか」

「そうだ。首都東京が乗っている岩盤が不等沈下すれば、表層部分がスライドして日本海溝へ沈んでいくことになる……」

斉木は彼と話を交わしながら、彼が指摘する箇所のデータシートを綴りから離して会議用の大きなテーブルのうえに並べていく。

「待てよ、ゼロメートル地帯や東京湾はどうなんだ……」

水没しているゼロメートル地帯のデータがないのだ。ゼロメートル地帯のほかに、東京湾なども観測の空白地帯になっている。

「じゃ、衛星からの写真を見てみるか」

斉木が壁のスイッチを入れた。
大型モニターが現れ、スクリーンに日本列島が映し出された。斉木は関東地方をズームアップしていく。
「あれはなんだ……」
ゼロメートル地帯の一角で、水面から突きで出している中層高層超高層のビル群の一部が軒並み大きく傾き、倒壊しているのもあった。
「もっとアップして……」
ゼロメートル地帯をクローズアップしていく。
「異常な不等沈下が起きているのかな……」
「東京湾の方へ移動して……」
海底から泥が噴き出しているように海水が濁っている。
突然、電話のベルが鳴った。
「そっちへ行く」
斉木は受話器に向って言い、「一寸、人が来た」と言いながら、会議室から出ていった。
彼はモニターのそばにより、画面の映像を移動して東京湾を南下していく。海水の濁りは消えることなく、濁りの帯がつづいていた。
沿岸に寄せると、埋立地の工場や火力発電所の敷地には浸水があり、一部が完全に水没している。石油コンビナートにも海が広がり、立ち並ぶ石油タンクも海のなかだった。原油や石油製品はすでに移し替えが済んでいるのか、付近の海面には油が洩れた様子が見られなかった。
彼はふと、東京湾の中心に向って沿岸部が沈み込んでいるような気がした。湾央に巨大な穴ができて、関東平野が呑み込まれていくのだろうか。
彼は急いで東京湾が一望できるように、映像を縮小していった。
そこにはいつもの東京湾があった。
しばらく東京湾の全景を見てから、内陸部へと移動させた。
彼はモニターを見ながら、異常箇所を丹念にチェックしていく。異常箇所と思えるところは二〇箇所を超え、思ったよりも多かった。
彼は実際に目で確かめたいと思う箇所を書き出し、地図に印を入れる。
もう一度、画面を東京湾に移した。やはり海水が濁っている。海底でなにか異変が起きているのだろうか。大沈下の予兆だろうか。
彼はメモを残して、会議室を出た。
途中、開放されたままのドアの隙間から、斉木が執務机にいるのが見えた。机のまえには話し込んでいる一人の男の後ろ姿があった。
社に戻ると、彼はデスクに一部始終を話した。
「夕刊に間に合うように記事を出しますから、東京湾に広がる濁水の写真を手配して下さい」
彼は社を飛びだした。記事を仕上げるまえに、地震専門家の何人かに取材しておきたかった。それとは別に、どうしても一度見ておきたいところがあったのだ。

## 5

「東京沈下はこのまま収束するのですかね……」
佐藤は研究室の片隅に置かれている作業机の椅子に腰を下ろすと、園部という若い研究員の丸い童顔を下から覗き、カマをかけるように言う。彼は背が低くいので、相手が大男でなくても自然に顔を傾げ、下から見上げ

るようになってしまうのだ。そんな様子が相手の警戒心を解くらしい。
多くの地震研究者が沈黙を守るか、いたずらに慎重に発言するなかで、この若い研究員は比較的思っていることをずけずけ言うほうだった。ことに、佐藤とは気が合うのか、新聞記者の取材にもかかわらず、いつも気楽に話す。まえの取材のときには平気で上司や先輩の研究員と違った見解を開陳して憚らなかった。
「そうはならないでしょう。東京が乗っている地殻構造の不安定さが改善するとはどうしても考えられないからです。それに、最近、一寸気になることが見付かりまして……」
「なんですか……」
「……」
童顔の研究員は大きな目をくりくり動かしている。話していいのか、迷っているらしい。
「東京湾の変化ですか。海水が濁り出しているが……」
「えっ……」
大きな目がさらに大きくなった。
「あれは大沈下の兆候ですか。それともまさか、すでに大沈下がはじまっているんじゃないでしょうね」
彼はカマをかけ、ぐいぐい押し込んでいく。
「うーん、そのおそれがあるらしいので、上の連中がいま本省のほうに相談に行っている……」
「……」
彼は斉木課長のところで見かけた男の後ろ姿を思い起こした。それで課長があたふたと席に戻っていったのか。
「一刻も早く、避難警報を出さなければ……」
「五年も前から警報は出ていますよ。それでも避難しようとしない。避難するところがないから避難できないのかもしれないが、避難しようとする意思もないんだ。だから、何度避難警報を出しても混乱するだけです」
童顔はのんきに構えて、作業机から動こうとしない。
「沈下のスピードは……」
「いままでは年数ミリから数センチだったけど、もっと速くなるかもしれない……」
「垂直方向か、それとも……」
「佐藤さん、知っているんでしょ……」
童顔はじっと目を凝らして、彼を見た。
「……」
彼はあえて怪訝な顔付きをして、童顔を見返す。
「東京が乗っている『プレート破片』が太平洋プレートに乗って移動するか、それとも置き去りにされて途中で落っこちてしまうか……」
中緯度付近のプレートの動きが逆転して、太平洋プレートが日本列島から後退しているのだ。これに応じて、それに引き摺られて東へ移動するような動きがフィリピン海プレーに生じているという。
「途中で落ちなければ、東京が移動するだけか……」
「東京が切り離されて離れ小島になるか、海中へ没するか……」
「どっちなんだ」
彼は童顔の目をじっと見た。
一瞬、童顔は真剣な顔付きになって、「最近、地球内部の動きがおかしいんだ」と呟く。

「で、いつなんだ」
「地球温暖化の果てに迎える列島首都東京の運命は……」
「やはり、近いのか」
「観測用の車を出しますから、一緒に行きませんか。そこの状態を見れば、近いか遅いかすぐ分かります」
園部は立ち上がると、ヘルメットと作業着と軍手を持ってきた。

6

「もうすぐですよ」
凹凸や亀裂の走る悪路をかなりのスピードで飛ばしながら、園部は前方を見たまま大声で言う。
佐藤はシートベルトの端と補助グリップを固く握り、激しい揺れに耐えていたが、もはや限界に近かった。園部はそんな彼の様子に気付き、声を掛けたらしい。それから三〇分程走って四輪駆動車はようやく止まった。
「ここから少し歩きます」と言い、園部は車のトランクから長靴を取りだし、彼にも履き替えることを勧める。
彼は作業服に着替え、ヘルメットを被り、軍手を嵌める。長靴は大きくダブダブで、歩きにくかった。彼は息を弾ませ、大股で歩く園部の後をついていく。
東京沈下区域の境界だった。亀裂の上には仮設の橋があった。
東京沈下が発生したとき、突然、関東平野の北部と西部の端で、東西（茨城、栃木、群馬）と南北（埼玉、東京、神奈川）の方向に一〇〇キロメートル程にわたり亀裂が走った。ここを境に、東京を中心とする一〇〇キロメートル四方程の範囲が沈下し、数センチから一〇センチ程の段差が生じた。これが東京沈下区域だ。
五年経ったいま、その亀裂は広いところで一〇メートルを超え、底にはところどころで水がしみ出ている。ちょろちょろと流れているところもあった。
「こんなに広がっていたのか……」
彼は驚きの声を発した。
「いや、沈下現象で多くの河川が分断されて、亀裂に大量の河川水が流れ込んでいるので、両岸の侵食が激しいのですよ」
関東平野の中心部には沈降して盆地が形成されたが、そこに周囲の山地から土砂が流れ込んで三〇〇〇メートルも堆積してできた沖積層や洪積層で、地質は柔らかく、崩れやすいのだ。さらに、富士山の大噴火で、一帯に降り注いだ火山灰によって関東ローム層が形成されたが、これらの地質はさほど変わりがない。
「で、実際の亀裂の幅は……」
「いま後退している太平洋プレートの移動速度は年数センチ程度じゃないかな。もっとも、もし、プレートが後退しているとすればの話ですがね」
「え、太平洋プレートは後退しているんじゃないの……」
「まだはっきりしないところがある」
「どういうことだね。観測できないのか」
「いや、もしかしたら、太平洋プレートを押し出す力が衰えて前進するスピードが落ちているのかもしれない。そこがよく分からない」
現在、太平洋プレートは年数センチ程度で後退しているが、前進するス

ピードが急に落ちたのでそう見えるのかもしれないというのだ。
「でも、亀裂の幅は広がっているようだが……」
「そう。ここのいまの状態から、例の『破片』はまだしっかりと太平洋プレートに載っかっているように見える……」
「じゃ、あの濁りは……」
彼は東京湾の濁った海水を思い浮かべた。
「それなんです、問題は……」
「地中でなにかが生じているということか……」
「多分、そうかもしれませんが……」
童顔は大きく頭を傾げた。
「多分、なんだ」
「東京沈下区域の地下に水が入り込んで、地盤を持ち上げ、スライドさせようとしているのかもしれない……」
「なんでそうだと分かるんだ」
「亀裂を流れる水をよく見て下さい。どうですか。足元に気をつけて下さい」
対岸より一段低い沈下区域側には水が染み出していた。彼は泥濘みに足を取られないように気を配りながら、できるだけ亀裂に近寄り、水流を観察する。
流れていると見えていた水面をよく見ると、ところどころに小さな渦のような流れがあった。それに分断された無数の河川から流れ込むのになぜかそれほど水嵩があるように見えないのだ。
「幾分濁っているけど、流水の量が思ったほどないね。途中で水がどこかに吸い込まれているのかな……」
「多分、沈下区域のローム層や砂利層に大量の水が吸い込まれていっているにちがいない。それが満水状態になって溢れてしまったサインが東京湾内に生じた濁りなのかもしれない……」
「すると、、沈下区域が液状化の状態にあるということ」
「まあ、そんな状態といえますか」
「亀裂を流れる濁った水がもともとある河川や水路を通って直接東京湾へ流れ込むということはないのかね」
「ここの水は本来なら大半が利根川水系から太平洋へ出るものでしょう」
「そうなると、あの濁りはやはり地下から溢れ出たものか……」
「多分……、あるいは海底に激しい沈下が起きたのか、どちらかでしょう」
「となると……」
彼は九鬼が異常箇所を探せと言っていたことを思い浮かべた。
「東京沈下区域はいま、『破片』に載ったまま離れ小島となるか、それとも上層の地層部だけが『破片』からスライドして海中へ向っていくかの岐路に立たされているのじゃないですか」
「離れ小島ならまだいいが……」
「海中へのスライドは困るというのですか」
「いや、両方とも困る。だが、一体、どうなればスライドし出すというのだ」
「あの状態では、一寸した拍子でスライドがはじまるでしょう……」
童顔を紅潮させ、園部はじっと広がった亀裂の間を流れていくる水を見ている。
「そうか。太平洋プレートの動きに変化が生じると危ないんだな」
彼は童顔が太平洋プレートの移動速度を気にしていたのはこのためだっ

たことに漸く気付いた。

太平洋プレートは年一〇センチ程のスピードで日本海溝から日本列島の下へで沈み込んでいるが、南東からフィリピン海プレートが日本列島へ迫っているので、太平洋プレートはフィリピン海プレートの下へ沈み込むかたちになっている。今回の沈下区域である関東平野が乗っているプレート「破片」は太平洋プレートに乗っており、その端にフィリピン海プレートの先端が接触しているらしい。

その辺で数年前から微震動が発生していたが、その原因は地中のマントルの動きの変化によってプレートの移動速度に変化が生じたからなのだ。太平洋プレートの速度が急に変化したため、フィリピン海プレートの押す力のほうが大きくなり、微震動が発生していたのか。

彼は地球温暖化の果てに生じた大気や海洋における大循環の変化が地球の自転に影響をおよぼし、それが地球内部のマントルに変動をもたらしているらしい。これも元を糺せば、人間活動によるものではないか。

自転速度が遅くなり、マントル対流の変動により中緯度付近の地殻がが膨張することになれば、これによって太平洋プレートの東への動きが止まることにもなりかねない。となると、太平洋プレートの上の「破片」はどうなるのか。東京沈下区域がフィリピン海プレートによって東の方向へ押しやられることになれば、「離れ小島」化よりもスライドする危険性のほうが高いのか。

地下に満々の水を溜めた東京沈下区域はいまや水面に浮いたような状態にあった。このような状態で、東京沈下区域はかろうじて太平洋プレートのうえの「破片」に載っかっているのだ。もし太平洋プレートの動きが一寸でも変われば、「破片」のうえの東京沈下区域はその変化に即応できず、慣性でそのままままえの動きをつづけ、「破片」からも滑り落ちることになるにちがいない。

「……滑り出せば、速いだろうな……」

彼は呟く。

「ええ、一瞬だと思いますよ……」

「ホントか。本当に、もう、間に合わないか……」

「……」

「おい、なにやっている。早くしろ」

彼は突っ立ったまま水面を見ている童顔のわき腹を小突く。

二人は車に向って走り出した。

「一刻も早く、避難を呼びかけなければならない。そのまえに、もう一箇所是非チェックしておきたいところがある。このまま真直ぐ行ってくれないか」

彼は車に飛び乗ると、童顔にけしかけ、スピードを上げさせる。

「どこへ行くんですか」

「九十九里浜へ出て、太平洋岸の沈降具合を是非見てみたいんだ。スライドの兆候が見られるかもしれない」

彼はもし首都圏が広がる関東平野が日本海溝へ向ってスライドしだしているなら、太平洋岸の最先端に位置する九十九里浜に異常沈下現象の兆候が生じているにちがいないと思ったのだった。

「ここから行くにはかなり遠回りしないと……」

「ムリか……」

「このまえ行ったとき、あそこの砂浜がかなり小さくなっていましたよ。海面が上昇しているのかと思いましたけど、もしかしたら、異常な沈下が

起きていたのかもしれません……」
「するとスライドが……」
沈下区域の関東平野が滑り出しているのか。そう思ったとき、彼の脳裏に斉木課長とまえの椅子の男の後ろ姿が浮かんだ。あの後ろ姿はまえに取材したことのある評価委員会の幹事役の委員じゃなかったのか。
そのとき、彼は沈下区域のスライドがすでにはじまっているにちがいないと確信したのだった。

## 7

「先生、それは間違いないのですか……」
斉木課長はさっきから自分でも気付かずに何度も同じことを繰り返した。
もし東京沈下が本格化するとなれば、そのまえに避難命令を出して沈下区域に残っている住民を強制退去させねばならない。彼はこうなることを懸念していたのだ。
「地震の予測には……」
執務机のまえに陣取っている横柄な面構えの男は斉木の追及に言葉を濁す。男は仰木というK大教授で、評価委員会の幹事委員だった。
「分かりますよ。だから専門の先生方に集まってもらって多角的に検討して評価していただいているわけです。予測が的確にできるなら、評価委員会なんかなくてもいいわけですから……」
評価委員会は集められたデータを多くの専門家で検討することで、いわば地震予測の精度を補う役目を担っているのだ。かといって、毎月開催している委員会を急に臨時に開催するとなれば、いよいよ東京沈下が間近に迫っているのじゃないかと勘ぐられ、必ずマスコミが騒ぎだすだろう。彼はこうなることを恐れているのだ。
だが一方で、彼は本格的な東京沈下が迫って来ているように感じていた。佐藤が突然訊ねてきたときから胸騒ぎがしてならなかった。この際、幹事役の進言にのって、臨時の評価委員会を開催して、東京沈下に踏ん切りをつけてしまいたいとも思う。
彼は幹事役の教授の大仰に構えている平たい大きな顔をじっと見た。
「東京湾の濁り発生をどうみるか、検討してもいいのでは……」
「東京大沈下の切迫を示すデータがあれば、緊急に評価委員会を招集することもできるが、一寸怪しいだけで開くとなれば、どうですかね……」
彼は頭の中で考えていることと違い、口では曖昧に濁す。本省の課長ともなれば、いたずらに発言して、責任を負う羽目になることは極力避けねばならない。評価委員会を緊急に開催すれば、東京大沈下が間近に迫っていることを印象づけ、マスコミに取り上げられた大騒ぎになることは目に見えている。また、さまざまなデータが示され、大沈下発生時期の検討もなされ、避難命令発令に直結する発生予告が出されることになるかもしれないのだ。
こうなれば、東京沈下が進行中なだけに、居残っている二〇〇〇万人の住民はいよいよやってくる大沈下の悪夢に襲われ、大震法（大規模地震対策特別措置法）の警戒宣言の発令をまたずに、避難行動を開始することだろう。道路には大きな荷物を抱えた避難民が溢れて大混乱し、収拾のつかない状態に陥るにちがいない。
「つぎの常会まで待ちますか。まあ、五年間も焦らされたわけですから、

一日、二日急ぐこともないですな。急に招集しても先生方が全員集まるかも疑問だし……」

仰木は事も無げに突き放す。

こう言われて、彼はかえって急に不安になった。

まだ新首都は竣工していないし、二〇〇〇万人の避難先も避難方法も準備万全とは言い難かった。政府はそれで一日二日と先に延ばしつづけていた。東京沈下は想定外の出来事であった。官僚組織で雁字搦めの政府機構にとって、このような全く新しい事態にどう対応していいのか分からず、事態の沈静化を待って、ただただ時間稼ぎに始終していたのだった。

官僚組織の一員である斉木にとっても、なにもせずに決定を先に延ばすことが考えうる唯一の対策でもあったのだ。ヘタな対応策を実行するよりも、先輩の教えにしたがって、前例がないことはやらないほうが賢明なのだ。

だが明日大沈下が起きたらどうなるか。仰木は評価委員会の緊急開催の進言を拒否したと吹聴し、責任を追及するにちがいない。それになにもやらないでいると、自分自身も東京とともに海中へ沈没していくことになるのだ。彼は一日も早く沈没の危険のある東京を脱出して、先に避難させている家族のもとへ行きたかった。

「明日じゃ急すぎるから、明後日に委員会を開くことにしましょう」

彼は自分でも思わぬことを口走る。彼は自分の言ったことを繰り返しながら、ようやく長い間の呪詛から解き放たれたように振る舞う自分を不思議に感じていた。

「では、いつもの時間にいつもの会議室でということでいいですな」

彼が大きく頷くのを見て、仰木は立ち上がった。

これで事態が好転するとはかぎらない。彼は机に座ったまま、背を丸めて去っていく仰木を後ろ姿を見送りながら、賽を振らなければどんな目が出るか分からないではないか、と自分に言い聞かせていた。彼は知らずのうちに、いささか自暴自棄的に開き直っていたのだった。

## 8

「佐藤くん……」

左手を伸ばして取った受話器の奥から、九鬼の声が響いた。

机でぼんやりと九十九里浜で取材のとき会った老漁夫の黒光りする皺だらけの顔を思い浮かべ、無意識のうちに、デスクへ渡し了えた夕刊の原稿を頭の中で反芻しているときだった。

「あ、先生、東京湾の海水が濁り出していますよ。それに……」

「やはり、そうか」

「え？　先生も気付いておられたのですか……」

「いや、微震動が急に途絶えたようなので、もしかしたらと思ったのだが……」

「微震動が……、そうですか」

「この数日かな。一時的なのか、どうか……」

「すると、いよいよ大沈下がはじまるのですか」

「そうとは断定できないが、多分その兆候と思えるので、電話したのだ」

九鬼は一時的現象かもしれないと言う。太平洋プレートを前進させるスピードとマントルの流れの変動でプレートを逆の方向へ押し上げる力との

間になんらかの原因で一時的に均衡状態が生じたもので、このため太平洋プレートの動きが一時収まっているだけにちがいない。
「このまま収束することもありうるのですかね」
佐藤は気が気でない。東京大沈下のはじまりかという記事を書いたばかりだった。
「さあ……、どの程度均衡状態がつづくか分からない。だがこれで収まることはないだろう。マントル流動の周期はまだまだ長いからね。ところで、ほかに変わった現象が見付かったかね」
「東京湾の海水が広い範囲で濁り出したのですよ。どうしてですかね」
彼はもう一度繰り返す。
「ホントか。もし、山や崖などでは土砂崩れのまえに濁水が噴き出すのことがあるけど、それと同じ現象だとしたら、沈下区域がスライドし出す前兆かもしれないな……」
「九十九里浜で取材したとき、最近、遠浅だった海岸が陥没したのか急に深くなったと言ってましたが……」
「そうか。それは大沈下がはじまっている兆候にちがいない。だがこのまま東京全体が大沈下していくかどうか……」
「スライドして沈下していくのですかね」
彼は園部の童顔を思い浮かべる。
「さあ……、なにしろ、微震動が止まってしまっているからな」
「ふたたび、微震動がはじまると……」
「そう、そのときは危ないかも……」
「それはいつころですかね、微震動が再開するのは……」
彼は九鬼にしつこく質す。彼はデスクに渡した記事原稿に手を入れるべきところがないか考えていたのだ。
「一時的だろう。すぐ動き出すかもしれないし、しばらく経ってからかもしれない。遅かれ早かれ、いずれ動き出す。間もなくかもしれない。たとえ東京沈下が収まることがあっても、海面上昇がはじまっている。北極海の氷が溶けてしまって海水温が急上昇して、グリーンランド氷床の崩壊がつづいている。関東平野一帯が海中へ没するのは時間の問題なんだよ、もちろん、東京もね」
九鬼はあっさり言う。
「沈下区域にはまだ二〇〇〇万人を超える住民が残っているですよ」
「政府は、自治体は何をしてたんだ、この五年もの間……」
「ゼロメートル地帯の避難民対策で懲りたのか、沈下区域の住民に対しては無策の策を決め込み、新首都やその周辺で住宅団地など専ら受け入れ施設の建設に重点をおいてきたといったところかな」
「それで彼らは移転をはじめているのかね」
受話器の声には皮肉な響きがあった。
「まあ、一部はね」
彼は斉木とデータを持ってきた若い課長補佐の青白い顔を思い浮かべる。
「スライド出したら速いからね。きみも早く移動したほうがいいよ」
こう言うと、九鬼は電話を切った。
彼はゆっくり周りを見渡たしながら、受話器を返す。
仲間の記者の姿は消え、空いた机が目立つ。多くは阿武隈高地の南端に建設中の新首都に建設した新本社社屋へ移動していった。すでに、東京の旧本社ビルには連絡員程度を残すことにして、社は全員に移動命令を出していたが、各省庁の多くが移転していないこともあって、記者の半数近く

がまだ旧本社に残って仕事していた。
彼はそろそろ新本社へ移ろうかと思い、机の整理をはじめる。だが引き出しのなかにはさまざまな雑多なものが詰まっていて、整理してもきりがない。かといってそんなまま段ボールの箱へ投げ込むのも憚れ、彼は途中で止めてしまう。
彼は机でしばらくぼんやりとして、童顔の園部を思い浮かべながら、関東平野が列島の本州から切り離され、まるで氷の上を滑るコップのように海中をスライドする様子を思い描いた。
首都圏が二〇〇〇万人の住民を乗せたまま日本列島からもぎ取られ、切り離されて離れ小島となり、波間を縫って流れていく。大洋の孤島となった列島首都は、程なく日本列島の大陸棚を離れ、日本海溝への急傾斜面へ突入していくのだろうか。そして現代文明の先端技術の粋を凝らした現代都市東京は超高層ビル群を従え、一〇〇〇〇メートルを超える深海へ超スピードで滑り落ちていくのだ。

## 9

「課長、夕刊に……」
課長補佐が差し出した夕刊の一面に、濁った海水が広がる東京湾の大きな写真のそばで「列島首都沈没か」の巨大文字が踊っていた。
「佐藤のやつめ、書きおったか……」
斉木は呟きながら見ていた夕刊を机の置くと、「ところで、白川くん」と隣の課長補佐を振り返る。
白川は書類から目を離し、椅子を回転させて端正な白い面長の顔を斉木に向ける。
「委員会の手配は済んだかな」
「はあ……」
「明後日と言ったが、明日にできないかな。まさか、今日の夕刊に書くとは思わなかった」
斉木は仰木教授の突然の来訪で、佐藤とデータをチェックしていた席を黙って中座したことを後悔した。あのとき、データのことを口止めするなり、一言引用不可と言うべきだった。こうしておけば、今日の夕刊に書くこともなかったはずだ。
「まだ間に合うと思いますが、明日では委員が全員出席できるかどうか、難しいかと思います」
「全員出席できなくてもいいことにするか」
白川は軽く頷くと、手を伸ばし受話器を取り、評価委員会開催日変更の連絡をはじめた。
斉木は評価委員会のお墨付きを得たうえで新首都への正式移動を考えていたが、まだ先のことと考えていた。だが夕刊の記事を見て、急に不安を覚えたのだ。
「課長、仰木教授と連絡が取れません。明日に変更することは時間的にムリかもしれません」
「分かった。ダメなら変更しなくてもいいが、もう一度やってみてくれ」
斉木は白川の白い顔を一瞥すると、受話器に手を伸ばした。
「佐藤くんか、ソースは確かなのか」
斉木は机に広げてある夕刊に目を落としたまま、受話器を左手に持ち変

える。
「ソースの心配なんかしなくていい。即刻、住民たちを避難させなければ間に合わないぞ。二〇〇〇万人もの住民をどうするのだ」
受話器の奥から、佐藤の怒鳴り声が響く。斉木は顔を顰め、受話器を耳から少し離して怒鳴り声を受け流す、
「近々に委員会を開き、警戒宣言を出す予定だ。だが住民たちは夕刊を見て、避難をはじめようとするかもしれないな。これまで避難を奨励してきたから、今回も自主的にやってくれれば助かる」
「おい、そんな言い方ないだろう」
「住民に直接接するのは東京都などの地方自治体の仕事だぞ」
「バカ言え。そんな形式論を言っているときか。首都東京が沈没するんだ。政府が率先して避難をリードしてなにが悪い。二〇〇〇万人もの住民を沈下エリアから安全なエリアへ移動させるのにどのくらいの時間がかかると思っているんだ。自主的に移動するのを待っていたら何年経っても終わらないだろう。もうすぐ大沈下がはじまるというのに、一体なにを考えているんだ……」
「そういうお前は避難もせずにここにへばり付いているのはなぜだ。内心、まだまだ先だと思っているんじゃないのか。それとも……」
「オレは仕事上東京沈没の最後を見届けるまでここにいなければならないのだ」
「ご立派だね」
「冗談言っているときじゃない。オレはこの目で見てきたんだ。もう大沈下がはじまっている」
「ホントか……」
斉木は夕刊一面トップに載っている濁水の広がる東京湾の大きな写真にじっと目を据える。
突然、東京湾中央の海面が凹んだように見えた。次の瞬間、海面が盛り上がり、鎌首を立てて海が押し寄せてきた。
斉木は受話器を持ったまま腰を上げ、呆然として立ちつくしていた。

# 第二章

## 10

「突然お集まりいただきましたが、実は……」

斉木課長が挨拶をはじめた瞬間、ビルが大きく揺れた。会議室のテーブルのうえでミネラルウォーターのボトルが倒れる音がした。

斉木は身を屈め、天井を見た。空席が目立つ委員席で、白髪の座長は身体を傾げ、テーブルの下へ潜る体勢を取った。幹事役の仰木は両手でテーブルを押え、身体を硬直させていた。他の委員もつぎの動作に備えようと、身を屈めたり、息を詰めて身構えたりしている。

大きな揺れは一回だけだった。小さな揺れが余韻のようにつづく。

「いよいよ大沈下がはじまりましたか。集まっている新しいデータを検討することにしましょうか」

座長が顔を上げ、姿勢を正した。

「お願いします。欠席の先生方も多いのですが、よろしくお願いします」

斉木はそそくさに挨拶を了え、隣の白川に目配せすると、「別の打ち合わせがありますので……」と小声で座長に告げ、席を立った。

自席に戻ると、斉木は執務机の椅子にどっかり腰を落とし、室内を見回した。室には数少ない室員しか残っていなかった。大半は新首都の新しい庁舎に移って、本格的移転の備え、準備に携わっていた。

「きみ、今の地震だが……」

室に残っているひとりの係長を呼んで、直前の揺れについての情報収集を命じる。

彼は今回の評価委員会の開催を経て、警戒宣言の発令を具申するつもりでいた。今日の評価委員会は専門家の検討というより、「戒厳令」なみと言われる大規模地震対策特別措置法（大震法）に基づく警戒宣言発令のための儀式にすぎなかったのだ。

とは言っても、すでに沈下から五年を経過している東京沈下区域に対する警戒宣言は、いまだに沈下区域にへばり付いて離れようとしない住民を強制避難させる程度のもので、すでに殆どの都市活動も停滞し、住民に約半数が地方へ移転していったいまとなってはあまり実効のあるものとは思えなかった。

だが斉木には別の考えがあった。

残っているのは東京という都会に愛着を持ち、この地に執着する二〇〇〇万人の最強軍団ともいうべき人たちだった。さもなければ、行くところのあてのない年金暮らしの老人たちだ。でなければ、いまさら転居する気にもなれない一人暮らしの年寄りたちだった。

彼らは決して自分から動こうとはしない。二〇〇〇万人におよぶ移転反対の彼らを移転させるには強制的にするほかないのだ。

東京都や他の地方自治体も彼らに対して積極的に対応できずにいた。数が多すぎるのだった。国が何とかしてくれるだろうと密かに期待していたのだ。

斉木は地方自治体が動くのを待った。彼は時間稼ぎに徹して、地方の担当者と根比べをしていたのだ。

二〇〇〇万人と一口で言っても、その数が桁外れのものだった。移転させるにも時間がかかるし、移転させる場所を探すことも容易なことではな

い。できればなにもしたくないのだ。
だがそれも限度があった。もはや、時間稼ぎする時間がなかった。
二〇〇〇万人もろとも海中へ沈むか、それとも二〇〇〇万人の首に縄をつけて一緒に逃げ出すか、の選択肢しか残っていなかった。
彼は夕刊を見ながら、二〇〇〇万人と一緒に逃げ出そうと思った。そして大震法による「戒厳令」なみの警戒宣言の発令に思い至ったのだった。
大震法、すなわち大規模地震対策特別措置法では大地震が予知されれば被害発生を最小限度に抑えるために、都市機能をストップさせたり、社会活動を制限したり、地域住民を避難させるなどの警戒宣言を発令できる。東京沈下の場合、すでに地震が発生しているが、彼は大沈下を予知することによって、この警戒宣言を発令できると考えたのだった。
二〇〇〇万人を強制退去させるにはこれしかない。土地にへばり付いている人びとをごぼう抜きするには、この警戒宣言によって全国から自衛隊を動員して力ずくで実行するほかないのだ。
斉木は佐藤が書いた夕刊の記事に触発されたのか、突然、妙に高揚する気分をもてあましながら、一晩中眠らずに考えたことだった。
「課長、東京沈下区域が太平洋へ向った動き出しているそうです」
係長が顔を紅潮させ、素っ頓狂な声を出した。
「なんだと……」
斉木は一瞬、頭の中が真っ白になった。顔から血の気が引いていくのを感じた。
「東京が本州から切り離されて東へ滑りだしているらしいといっています。いまテレビを持ってきます」
斉木は係長の声を背に、小走りに会議室へ向う。
会議室では白髪の座長が発言していた。少壮のころは頭の切れる男だったが、年をとって話がくどく長くなった。だが事務局との折り合いがよく、まとめ役として重宝されていた。
「……微震動が沈静化しつつあるのなら、東京沈下は様子見にして、こんどは東海や東南海のほうに検討の重点を置くべきではないか。微震動が収まっているということはプレートの動きも一時的に収まり、動きが逆の方向へ反転する時期を迎えているのかもしれない。もしそうなら、東海、東南海、南海のプレート地震が……」
座長は斉木の姿にも気付かず、委員たちと一緒に配付されている分厚い資料を捲くりながら、ぼそぼそとした声で発言をしつづけている。
「先生……」
白髪の頭が動き、座長の顔が正面を向いた。
「……」
座長は目の前にいないはずの斉木がいるのに驚いたのか、口を半ば開け、彼の顔をじっと見つめている。
「東京沈下区域が滑り出しているそうです……」
斉木は血の気のない顔を震わせ、「白川くん、テレビを……」と命じる。
中央に引きだされた大型テレビに電源が入ると、上空のヘリコプターからの映像が映し出された。
沈下区域境界の亀裂が大写しになった。見る間に亀裂が広がっていく。
亀裂に架けられた仮設橋梁は余裕をもって長めに設計されているのにもかかわらず、すべての橋梁は亀裂の溝へ落ちていた。地滑りとともに橋梁の端がずるずると両岸から引き摺られてらしく、橋梁が設置されていた両岸には深くえぐられた生々しいあとが残されている。

亀裂の両岸からはいまも絶え間なく土砂が崩れ落ちていた。仮設橋梁のあった両岸に放置されたままになっている何台もの車が、相次いで亀裂へ吸い込まれるようにつぎつぎと溝へ落ちていく。仮設橋梁は数珠繋ぎの車の乗せたまま亀裂のなかへ落ちていったらしい。

一瞬運良く難を逃れたのか、何人もの避難民が遠巻きに滑り落ちていく車を見守っていた。昨日の夕刊を見て、移住を決意した避難民にちがいない。亀裂の仮設橋梁付近には昨夜から荷物を満載した無数の車が押し寄せ、渡る順番を待っていたのだ。

「ああ……」

息を詰めて画面を見つめていた委員の誰からともなく、悲鳴が洩れた。

ヘリコプターは境界の亀裂の上を飛んでいく。

群馬、栃木、茨城の南部を東西に走る沈下区域北側の亀裂に架けられた六本の仮設橋梁も、埼玉、東京、神奈川の西部を南北に走る沈下区域西側の亀裂に架かる五本の仮設橋梁も、すべて亀裂の淵に呑み込まれていた。

亀裂は次第に広がり、沈下区域は本州から切り離されていった。

斉木は音を立てずに会議室を出ると、ふたたび執務室へ戻っていった。

## 11

一瞬、全身を揺するように身を震わせた。全身を揺すりながら、大きくねじる。ぽきっと骨が折れるような音が響いた。それからまるで縄を解かれたように、関東平野一帯に広がる沈下区域が太平洋へ向って滑り出していった。あとには房総半島の南端の一部がぽつんと海の中に取残されていた。

本州から切り離されて誕生した「首都圏（沈下区域）島」が、銚子犬吠岬を先頭にして押し寄せる波を押し返し、白波を立て氷の上を滑るように海面を切って進む。九十九里浜の砂浜は波間に消え、防砂林の松林が海水に洗われていた。

「首都圏島」の新しい海岸線となった東西と南北に長く走るかっての境界の亀裂は海水に洗われて侵食されていく。さらに陸地からも絶え間なく土砂が崩れ落ち、新しい海岸が後退しつづけ、首都圏島全体が一回り小さくなっていった。

本州から切り離されて関東平野は、まるで彷徨える小島（首都圏島）となって大海原を太平洋へ向う。彷徨える首都圏島は周囲を海水に洗われ、海岸が激しく侵食されながら海面を滑っていく。

三浦半島の目の前に、取残された房総半島の一部が迫った。首都圏島はそのまま東進をつづける。三浦半島の東側に突き出している観音崎が海中に突き出た鋸山の岩肌に突っ込み、つづいて半島南端の剱崎が押し潰された。

瞬間、首都圏島に衝撃が走った。三浦半島の先端が折れた。衝突して瞬間、首都圏島は身体をくねるように右に回転し、大きく南に方向を変えながら通り抜けていく。

首都圏島はこのまま、日本海溝か伊豆・小笠原海溝へ向って突進していく勢いだった。だが二、三〇キロ沖合に出たところで、急ブレーキがかかったように、移動速度が急速に衰え出した。

貯えられていた運動エネルギーを使い果してしまったのか、首都圏島は日本海溝、伊豆・小笠原海溝への急斜面手前で動きを止めた。まるで海溝

への落下を拒否しているようだった。
だが動きが止まった途端、首都圏島の沈下がはじまった。首都圏島のいたるところに細かい亀裂が走り、水が噴き出した。低地に水が溢れた。
海岸辺りの超高層ビルが傾き出し、やがて倒壊していく。
海水に洗われている首都圏島の周囲の海岸地層で崩壊がつづいていた。ことに、本州から切り放たれた境界付近での崩壊が次第に激しくなった。丘陵は崩れ、人家や農地が海中へ崩れ落ちていく。境界に近いところに位置した市町村では押し寄せる海水に海岸線が大きく侵食されていった。人びとは街や集落が大口を空けた海に呑み込まれていくのを見守るほかなかった。
最初にできた沈下区域境界亀裂から五〇〇メートル、所によっては一キロメートル程度内部に入ってところまで侵食がおよんで、陸地の崩壊が一時的に収まった。
漸く、首都圏島の海岸浸食の動きが鈍くなった。
だがしばらくすると、首都圏島がふたたび微かに動き出した。首都圏島が緩い傾斜面に乗っていたのか、自然に滑りだしたのだ。

## 12

斉木は人影がなくなった執務室で虚ろな目を窓の外へ向けたまま、じっと窓辺に立ちつくしていた。
真下を走る片道三車線の車道には数珠繋ぎの車が犇めき、六メートルもある歩道には歩行者が溢れていたのがウソのように、通過する車は一台もなく、一人の通行人の姿もなかった。
やはり、判断を誤ったか。彼の胸を苦い思いが過る。
評価委員会の幹事役の仰木が訪ねてきたとき、即決して臨時の委員会を開かなかったのか。なぜ仰木の意見を率直に受け入れようとしなかったのか。
彼はしばらく窓辺に佇み、落ち着きを取り戻すと、ふたたび会議室へ戻った。
会議どころではなかった。
委員たちは大型テレビのまえに椅子を持ちだし、釘付けになっていた。彼は音を立てずに、彼らの後ろへ回っていく。課長補佐の白川が彼に気付き、黙礼する。
ときどき揺れる。誰もが椅子から立ち上がろうとしない。
斉木は口を開けて呆然としてテレビの画面を見ている委員たちを見て、会議冒頭の委員たちを思い浮かべた。これから集まったデータを検討し、東京沈下について議論を重ねる予定だったが、緊迫した面持ちをしているものはひとりもいなかった。
昨日の夕刊を見ていないのか、委員の誰もが、今回も前回同様、「近い将来大沈下が起こる可能性があるが、もうしばらく観測をつづけることにする」といった結論となるだろうと思っていたにちがいない。
不思議なことに、彼らはテレビに映っている画面をまるで月か火星かの出来事かのように見ているふうな面持ちをしている。あまりに突飛すぎて、自分たちがいまいる会議室のあるビルが波を切って日本海溝か伊豆・小笠原海溝へ進んでいる首都圏島のうえに建っているなんて、彼らには想像することさえできなかったのだ。

「一蓮托生か……」
彼の口から呟きが零れた。
突然、会議室の隅で、電話のベルがけたたましく鳴った。白川が走って、受話器を取った。
「課長、対策本部からです」
白川はクセある目付きをして、受話器を斉木に手渡す。
「田中だ」
受話器の奥から甲高い声がひびく。田中は斉木と同じK省の同期で、東京沈下の対策のために設置された首都圏沈下対策本部へ出向中だった。
首都圏沈下対策本部は東京沈下発生直後内閣府に設けられたが、内閣府の新首都への移転にともない対策本部も一部を東京に残して移転した。田中は残留組で、現地での実質的な責任者だった。
「ああ……」
「どうなっているんだ、評価委員会は……」
「地震の予測はまだできないということだ」
「M紙の夕刊が出てから、委員会を開くとは……。だからこんなことになるのだ」
「折角、五年間も時間稼ぎをしてやったのに、ロクな対策も講じようとしないでなにを言うんだ」
斉木が堪りかねたように、大声を出した。電話のベルにわれに返ったように、テレビから離れて席に戻っていた委員たちが委員席から一斉に振り返った。
「バカ言え。重要な資料や美術品等の貴重品はほぼ持ちだしたし、住民も半数の避難が済んでいる……」
「まだ、二〇〇〇万人の住民が残っている。二〇〇〇万人の命はどうなるんだ……」
「どうすればいいんだ。もう五年間の猶予がほしい……」
「そんな余裕はもうないだろう」
斉木はテーブルについている委員たちの顔を見回す。白髪の座長と目が合ったが、座長はすぐ目を離した。
「自衛隊に避難民の救助要請を出したところだが……」
田中は曇った声を濁す。救助する人員が二〇〇〇万人にもおよぶともなれば、救出作戦を立案するだけでも容易ではない。時間が限られているなかでは最大限効率のよい方法でなければならないのだ。二〇〇〇万人ともなれば船舶による大量輸送だが、とにかく首都圏島からの避難には問題が多すぎた。
本州から切り裂かれた北側と西側の海岸は切り立った崖で極めて脆く崩壊しやすいため、このままでは船舶が接岸することができない。残っているのは東側と南側となるが、かなり遠回りになってしまうし、ここも侵食が進み、接岸できる船舶も制限される。
とにかく、接岸場所を決めて船舶を調達できれば、つぎは避難民の集結方法だった。避難民が集結しやすいところに船舶が接岸できればいいが、首都圏島は多少小さくなっているものの、一〇〇キロメートル四方の大きさだ。そのなかに二〇〇〇万人の住民が何十箇所何百箇所の市町村に分散して、郊外の果てまで開発して虫食いのように広がって住んでいるのだ。
「……」
斉木は黙って聞いているほかない。
「ところで、いまの状態はどのくらいもつのかね。そこのところがはっき

り分からないかな。それが避難民救出のタイムリミットとなる。至急、そちらの評価委員会で検討して欲しいのだが……」
田中は横道のそれた話を元に戻すように言う。
「うん、いま委員会を開いているから、意見を聞いてみよう」
斉木は田中の返事を待たずに、受話器を置いた。一瞬、ビルが微かに揺れたように感じた。
彼は足早に席に戻り、正面の座長に顔を向ける。
それを待っていたのか、白髪の座長は「今日はこれで散会しましょうか……」と惚けたような声で言う。委員たちも配付された資料類を紙袋に詰め、すでに帰り支度を了えている。
「これからどうなされるのですか……」
斉木は委員たちを見渡し、おもむろに尋ねる。委員たちの多くは家族を避難させて一人暮らしのはずだ。なかにはすでに対岸の非沈下地帯へ居を移していて、会議のために仮設橋梁を渡って出張してきた委員もいるのだ。
委員は誰一人口を開こうとしない。
「……このままここで様子をみていてはどうでしょうか。いま自衛隊に救出を依頼しているそうですので……」
彼は座長から幹事役に目を移す。仰木は臨時の開催を主張したことを悔いているのか、俯いたままテーブルの資料に虚ろな目を落としている。
「いつまで待てばいいのですかね。家族とも連絡を取りたいが……」
携帯電話を弄くっていた委員の一人がボソボソと言う。
「どうぞ……」
「繋がらない……」
細い声だった。
斉木は顔を引きつらせて携帯を弄っている委員を見ながら、本州から切り離されて海に浮かぶ首都圏島を思い浮かべた。思い浮かべたというより、首都圏島に取残されたことを意識させられたのかもしれない。
携帯が繋がらないのは通話が殺到しているからなのだろうと思う。そうじゃなくて首都圏島が本州から遠く離れてしまい、電波が届かなくなってしまったからなのではないのか。そう思った瞬間、多くの人びとと繋がっていた糸が切れて、全身が凍りつくような孤独感に襲われた。
二〇〇〇万人もの人びとともにいるはずなのに、また、目の前に白髪の座長や顔見知りの委員たちがいるのに、彼はまるで孤島にただ一人取残されてような気分に襲われ、思わず立ち上がって、窓辺に寄る。
もう本州に移転した家族とも連絡が取れないのか。救出に来るはずの自衛隊も来ないかもしれない。誰とも連絡ができないまま、日本海溝の深淵へ呑み込まれていくことになるのではないか。孤独感がひしひしと胸を締めつける。
彼は窓の外へ目を向けた。
雲に覆われていた空に、いつの間にか、黒い雲が立ち込め、雨が降りだしていた。時折、雷光が走る。大粒の雨が窓ガラスを打った。
彼は気を取り直し、席に戻ろうと振り返る。
突然、ドアが開いて、小柄な男が飛び込んできた。

## 13

「間に合ったか……」

「なんだ、佐藤か……。会議中だぞ」
斉木は窓辺に立ったままだ。
「闖入して申し訳ない。実は……」
佐藤は濡れた上着を脱ぎ、濡れた頭髪から滴り落ちる水滴をハンカチで拭きながら、口早に言う。
いま本州からヘリコプターで飛んできたところだが、救援の要請を受けたはずの自衛隊の動きが極めて鈍い。対策本部の指示を待って待機中だという。対策本部を取材してみると、評価委員会の判定を待っているところだった。どうせ、また、五年前と同じように観測をつづけることになるだろう、と暢気に構えている。
「二〇〇〇万人を道連れにいまにも日本海溝へ落ちていくというのに、そんな話はないだろう。そこで、おまえとこへ何度も電話したが誰も出ない。だから、わざわざ飛んできたんだ……」
佐藤はつづけて、「電話どこに置いてあるんだ。白川さんよ、部屋が留守になるんだったら、会議室に持ってこなければ……」
きょとんとしている白川に「衛星電話だよ」と言うと、佐藤は大きなくしゃみをつづけてふたつして、「着替えてくる」と言って、会議室を出ていった。
佐藤の後ろ姿がドアから消えると、斉木は席に戻り、白髪の座長に軽く会釈して隣の白川に「じゃ、はじめるか」と声をかけた。
「先程、対策本部から、本州から切り離された沈下区域首都圏が今後どうなるかと聞いてきましたので、これについてご検討いただきたい。至急、結論を頂きたいと思います。念のため申し添えていきますが、自衛隊による救出活動はその結論次第となります。よろしくお願いします」
「今回の動きについてのデータや資料は……」
委員のひとりが前に配られた議事予定（案）や資料を捲りながら、ボソボソとした声を出した。
「まだ用意できていませんが……」
白川が口を挟む。
「とにかく、現に発生中の現象ですから、データの用意はムリでしょう」
座長は目を丸くして委員の顔を覗く。
座長の発言に委員たちは頷くが、それから長い沈黙が支配した。データがなければなにも分からないし、今後のことを判断することもできないと思っているらしい。
「本州から切り離されたメカニズムと、そして首都圏が切り離されてから何キロも動いたメカニズムをどのように考えればいいのでしょうか。これらが解明されれば、離れ小島となった首都圏にこれからどんな動きが生じるか予測することができるのではないでしょうか」
端の席の一番若い委員がおそるおそる発言する。
白髪の座長は委員たちを見渡し、「意見はないか」と発言を促すが、いつまで経っても誰も口を開かこうとしない。それでも座長はのんびり構えている。
「座長、時間がないんです。先へ進めて下さい」
苛々しながら会議の様子を窺っていた斉木が叫ぶ。
「データがなくて検討をつづけることができなければ、会議をつづけても意味がない。この先は海溝へつづく急斜面となるが、首都圏がここで留まっているかどうか分からない。いい加減な議論をつづけるよりも、一刻も早く救出活動がはじめられるようにすべきではないか」

座長の隣に座っている最古参の委員が斉木に呼応するようにまくし立てる。
「それじゃ、本日の検討結果は『本州から切り離された首都圏（以下、首都圏島という）はこのまま東南の方向へ進み、近い将来、日本海溝へ沈んでいく』と纏めることにしていいですか」
幹事役の仰木委員が座長の顔と斉木の顔を見た。
「『近い将来』は曖昧ですね。もうすこしはっきり言えませんか」
座長が仰木に顔を向ける。
「明日じゃ早すぎますし、一か月じゃ間がありすぎますか」
「数日から一か月以内にとしておきましょう」
座長は一仕事を了えたと言わんばかりに、右手の掌の平で長く延びた白髪を丁寧に撫でた。
「バナナの叩き売りじゃあるまいし……」
何時戻ってきたのか、佐藤が会議用大テーブルの端から身を乗り出し、大声を発した。
座長は佐藤を一瞥し、「こんなとこでどうですか」と言うふうに、斉木に目をやる。それから委員をひとりひとり順に見回していく。
儀式が終わりかけていた。佐藤はじっと白髪の座長を見守る。
「あのう……」
さっき発言したテーブルの端の最年少の委員だ。座長の脇で、幹事役の仰木が目を光らせる。
「なんだね」
座長は若い委員に無表情な顔を向けた。
「数日から一か月以内では救出がいつになるか分かりません。もっと短くしたほうがいいのじゃないでしょうか」
「たとえば……」
「一週間以内とか……」
「短く限定するなら、それらしい理由づけがいるが……」
「それは今回の移動メカニズムから推定できるのではないでしょうか」
「ほう。で、そのメカニズムとは……」
「わたくしはこのように考えているのですが……」
委員は顔を紅潮させてつぎのようなことを言った。
首都圏のある関東平野は太平洋プレート上にあるプレートの「破片」に乗っているが、マントルの変動で中緯度付近のプレートが膨張過程にあり、太平洋プレートの動きが逆転したため、プレートとともに「破片」も東方へ移動した。一方、「破片」を上から押し込んでいるフィリピン海プレートにもマントル変動の影響がおよび、「破片」をさらに東方へ押した。このため、本州から関東平野が引きちぎられ、首都圏が分離することになった。
「ほう。それではなぜ、今日、突然大きく移動したというのかね」
「今日、漸く、本州から完全に分離したのではないでしょうか。綱を引っ張りあっている子供の一方が耐えきれられなくなって綱を放したような状態になって、分離した首都圏が飛びだしたのではないでしょうか」
「すると、現在……」
「いま、首都圏がほぼ静止状態にあるのは貯め込んでいたエネルギーがゼロに近い状態になってしまったと考えられるじゃないかと思いますが……」
「座長、いいですか。その『破片』は三〇キロ以上も深いところにあるらしいというんでしょう。そんなところで『破片』が関東平野を乗せて何キ

ロも水平移動することが考えられるのですか」
別の委員が座長の返事も聞かずに、早口でまくし立てる。
「ええ、そこが不思議なんです。それでこんな仮説を考えてみたんです……」
その仮説はこうだった。関東平野を乗せた「破片」は太平洋プレートの逆転とともに東方へ引っ張られていたが、本州から引きちぎられた拍子に急速に移動した。さらにフィリピン海プレートに押された恰好で移動したが、太平洋プレートの動きが止まったところで、関東平野が乗っている上層の地層だけが滑り出したというものであった。
「振り回していた棒の先だけが飛んだということですかね……」
白髪の座長は欠伸をかみ殺しながら、のんびりした声を出した。
「まあ、そんなところですか……」
「それで、今後は……」
仰木がせっつく。
「途中で空中分解しなければ、傾斜面に沿って海溝へ向って滑り落ちていくことになるでしょう」
最年少の委員は急に老けたような声になった。
一瞬、しーんと静まり返り、しばらく、誰も口を開かなかった。

## 14

「いつもあんな調子なのかね、あの座長は。あれではバナナの叩き売りじゃないか……」
佐藤は斉木を見て、にやにやしている。
「まさか、今日は特別だ」
「だがあの発言があって、救われたな」
佐藤は最年少の委員の地味な顔を思い浮かべる。
「あの男はこれまで一度も発言しなかったんだ。そろそろ変えようかと思っていたんだが……。あんなメカニズムを考えているとは……」
斉木は半信半疑の面持ちで、考え込んでいる。
「『空中分解しなければ』はよかったな」
「多分、いずれ空中分解するんだろうな、首都圏島は。そして藻くずとなって日本海溝へ落ちていくのだろうな。首都圏島の表面の地層だけが石切りの石のように海面を切って進んでいくとすれば……」
斉木はひとり悦に入って、自分に言い聞かせるように呟く。
「ところで、あの委員会がいつから『地震発生の可能性や今後の見通し』をやるようになったのか。判定をやるのは別のところじゃなかったのか」
佐藤は斉木を現実に引き込む。
「あっちの代役だよ。なにしろ、最近はひとが集まらなくなってね。政府の委員会も方々で機能不全を起しているんだ。それで代役を買って出たというところだ」
「それにしても酷いもんだ。あの白髪の座長は……」
佐藤の脳裏に座長の代わりに「白頭大人」の角張った顔が浮かんだ。
「そういうな。こっちの意を酌んでくれる貴重品的存在なんだ。今回も救出活動を一刻も早くはじめて欲しかっただけだし……」
「ところで、どうするんだ。これであの委員会もお役ご免だろ」
「まあね……」

「オレはヘリで本州へ帰るが、一人ぐらいなら乗れるかも……」
「家族とはもう一年も会っていないな」
斉木は遠くを見る目をした。
「どうする。二〇〇〇万人と心中するか」
佐藤は斉木の心中を見透かしたように言う。
「敵前逃亡か……」
「一度帰って、また来る手もあるゾ」
「うん……」
斉木の煮え切らない態度に、佐藤は「社へ帰る。気が向いたら、電話くれ」と言い残して、立ち上がった。彼の脳裏にふたたび「白頭大人」のこじんまりとした角顔が浮かんだ。

## 15

自衛隊による二〇〇〇万人救出作戦がはじまった。
首都圏の沈下区域内に駐屯していた陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊は、管理要員のみを残して、駐屯地や基地から人員、装備、武器、弾薬等のすべてを撤収し、すでに沈下区域外への移転を了えていた。そのため、今回の救出作戦のために新たに部隊を編成し、首都圏島へ派遣することになった。そのための準備にはかなりの時間を要する。そこで、作戦遂行の緊急性を考慮して、全体の準備完了を待たずに、準備を完了した隊から順次現地へ出発することになった。
本州と連絡する橋梁のすべてを失い、完全に離れ小島となった首都圏島から二〇〇〇万人を救出するには車輌はもちろんダメだし、かといって大型輸送機を利用することもできなかった。成田や羽田などの民間空港はいうにおよばず、横田、入間などの軍用飛行場でも滑走路がいたるところで沈下し、使用不能の状態だった。救出には船舶と大型ヘリコプターを用いるほかなかった。
まず、船舶の確保と配船計画が練られ、船舶の接岸候補地が決められた。
自衛隊の到着を待たず、首都圏島の都県や市町村の各地方自治体は事務職員や消防隊員のほか、医師や医療従事者、介護士などを動員して、災害時の救護態勢を整え、住民たちを最寄りの乗船場所へ搬送する準備が開始された。
ここで問題が生じた。
ひとつは船舶の接岸可能な箇所が最初考えていたより遥に限られていたことだった。東京湾内の港湾や銚子などの太平洋岸の漁港が候補に挙げられていたが、先発隊の実地調査の結果、移動過程で損傷したり、海底地形に変化が生じていることが判明し、大型船が接岸できる状態ではなかった。ことに東京湾内の海底に隆起している箇所が見付かり、従来の航路が利用不能であった。
つぎは二〇〇〇万人にもおよぶ多数の住民を乗船場所まで搬送することが容易でないことだった。接岸箇所が限定されていることもあって、乗船場所まで歩いて集合できる住民は付近のごく僅かにすぎなかった。車輌を調達して搬送することが考えられたが、道路の破損が酷く、無理して通行しようとしてもスピードを出すことができないのだ。それに橋が落ちているところも多く、迂回が避けられない。これでは迅速に大勢の住民を搬送することはムリであった。

急遽、作戦計画が変更され、取りあえず、ホーバークラフトタイプの大型上陸用舟艇と大型ヘリコプターを主体とする救出活動を実行する一方で、できるだけ早く、本州から切り離された首都圏島の北側と西側の海岸の適当な地点に大型船舶用の仮設桟橋を建設することになった。

これで問題が解決したわけではなかった。

止むを得ないとはいえ、上陸用舟艇と大型ヘリコプターを主体とする作戦では一回に救出できる人員は知れたものだった。二〇〇〇万人が救出対象となっている本ケースではこれは最悪の選択肢であった。

かといって、一刻の猶予もなかった。即刻、上陸用舟艇と大型ヘリによる救出活動がはじめられた。

ヘリコプターによる救出では、病人や幼児・子供、年寄りが優先された。だが順位をめぐる争いがあったり、また悪天候で運航できなかったりして、思うように進まなかった。

また、上陸用舟艇は砂浜のような大きな段差のないところならどこでも上陸可能であったが、これも天候に左右されることがあった。海上が荒れれば大きく揺れ、乗っているだけでも恐く、年少者や女子には過酷なものだったからだ。

一方、救出用仮設桟橋の建設には意外に時間がかかった。大型船用の接岸岸壁の建設のほかに、航路を確保するために浚渫工事が必要なのだ。

仮設桟橋の建設が進められる一方で、乗船者待合用のテントが設置されていく。

待ちきれない避難者が続々と集まりだす。

本州側も受け入れ準備がはじまったが、二〇〇〇万人をも収容できるテント村を一箇所に設営することは土台ムリなことであった。そこで、避難住民の上陸地点をはじめから分散することになった。

全国から大小の船舶が首都圏島へ住民の救助に向う。近隣諸国や米軍基地からも救援にやって来た。だが仮設桟橋の建設が思うように進まず、殆どの船舶が首都圏島には接岸できず、搭載のヘリコプターやゴムボートを用いて細々と救助活動をするほかなかった。

## 16

「東京が列島から分離して漂流しているんだって……」

九鬼だった。

「うん……」

衛星電話の受話器の奥から響く間延びした九鬼の声に、佐藤は一瞬声を詰まらせる。

「まだ東京にいたの。早く、移動したほうがいいよ。いずれ、東京は海にのまれるだろうから」

「やはりそう思われるのですか」

「分からないところがあるが、遅かれ早かれ、多分そうなるにちがいない」

「遅かれ早かれですか」

「東京が漂流しているメカニズムがはっきりしない。もし、例の『破片』岩盤とともに移動しているのだとしたら、しばらくそのままだろう。でなくて、『破片』岩盤から切り離されて漂流しているのだとすれば、ほどなく海中へ没してしまうことになるだろうな」

「どっちだと思っておるのですか」

佐藤は評価委員会の最後に発言した若い委員の顔をを思い浮かべる。
「もし『破片』岩盤とともに移動しているのであれば、漂流東京はしばらく安泰でも、つぎに、大地殻変動が日本列島を襲うことになるだろう。多分、太平洋岸の都市が軒並み壊滅する。だが、『破片』はかなり深いところにあるらしいので、東京が『破片』岩盤とともに漂流しているとは思えない」
「では首都圏島が『破片』岩盤から切り離されて漂流していることになるのですか。そして……」
佐藤は鼻を詰まらせる。
「『首都圏島』？　漂流中の東京のことか。なるほど、いいネーミングだね。で、その首都圏島は多分、列島からもぎ取られた当初は『破片』岩盤とともに移動していただろうが、途中で『破片』岩盤から分離したのじゃないかな。データを見ると、首都圏島の漂流スピードが途中から速くなっている」
太平洋プレートの後退とともに、「破片」が東方へ移動したとき、そのうえに乗っている関東平野にも東方へ強く引っ張る力が働き、亀裂が走る。東京沈下の際にできた東西、南北方向の亀裂だ。そのときはまだ完全に引きちぎれずにいたが、とうとう張力に耐えられずに今回亀裂が深部まで達して「破片」ともども関東平野（東京沈下区域）が列島（本州）からもぎ取られて移動しだしたというのだ。だが「破片」の移動は長くつづかず、上部地層のみが滑るように沖合めざして移動していったのではあるまいかという。
「ということはどうなんですか」
佐藤は遠く離れたところにいる九鬼が気楽にものを言っているように感じ、いささかむっとして強く言う。
「漂流中の首都圏島からの住民救助活動はもちろんだが、列島サイドもつづいて襲い来る災害対策も考えておかないと折角救助した住民たちをふたたび惨禍に巻き込んでしまうことになりかねない……」
「じゃ、どうすればいいんですか。二〇〇〇万人が救助を待っているんですよ。受け入れ態勢を万全に整えるまで待っておれない。全員を救出するにもかなりの時間がかかるでしょうし……」
「それはそうだが、救出しても太平洋岸辺りのテント村に収容するようなことになれば問題だということだよ。つぎに襲い来る惨禍を十分考慮しないとね……」
「地殻変動がつづくというのですか」
佐藤は半信半疑だった。
「大地震だけじゃない。熱波や日照り、大雨や巨大台風、食糧不足や感染症も忘れてはならない。これらはまだまだつづくことだ。当分、下火になることはない。それに……」
「まだあるのか……」
「海面上昇だ。もうはじまっている」
「当分の間は大目に見積もっても、高々数十センチのオーダーだろう」
「予測ではね。だがこれは平均の予測値なんだ。地球の全海面で上昇する値の平均がこうだということ。ところによっては一時的にはその数倍の海面上昇もありうる。たとえば、大潮や台風時、あるいは海流変動などで、海面上昇が局所的に増幅することが考えられるからね」
「海面上昇といっても、今日明日ということでもあるまいし……」
佐藤はうんざりしたように言う。

「もう、はじまっている。北極海の海氷がなくなって、北極圏が急速に温暖化している。グリーンランドでは氷床の崩落を繰り返している。そのうち、大崩落が発生するだろう。南極大陸、ことに西南極大陸だが、そこの氷床も崩落を繰り返しているのだ。それに日本近海では大潮などの海水位異常が発生しやすい。漂流している首都圏島はいつ水浸しになってもおかしくないのだ……」

受話器の奥から、九鬼の声が響く。

「……とにかく、遅かれ早かれ、首都圏島は沈下するか、さもなければ海面上昇によって海にのまれるかする。できるだけ早く、避難することだ。海面上昇すれば、その影響で地球システムがさらに撹乱し、さまざまな異変が発生することになるだろう。一刻も早く、首都圏島から離れたほうがいい。もし首都圏島が日本海溝へ落下するようなことになれば、別の問題が生じるだろう……」

佐藤は返事をせずに、点けたままになっているそばのテレビの画面に目を向ける。ヘリコプターからの首都圏島の様子が映し出されていた。

彼はふと「白頭大人」を取材してみようかと思った。

## 17

「ヘリに乗せてくれ。敵前逃亡することにした。女房のヤツ、一度顔を見せろというんだ。でなきゃ、離婚だと脅かすのでね」

斉木だった。

「丁度いい。途中、『白頭大人』を訪ねてみようかと思っていたところだ。案内してくれないか」

「『白頭大人』か。調べておこう。で、どうして急に……」

「まあね。こちらから迎えに行く。出るとき、連絡するから、屋上に出ていてくれ。屋上のヘリポートは使えるよな」

佐藤はゆっくり受話器を戻しながら、九鬼との電話でのやり取りを思い返えした。

あのとき、なぜ急に東京の奥地で自給自足の生活をしているという「白頭大人」を取材する気になったのか。首都圏島が海にのみ込まれて沈んでいくことを知らせ、白頭大人に避難を勧めようと思ったからなのか。

それとも、米国に去った九鬼が一時、気候変動予測研究を止めると言いだし、地球温暖化対策の実践活動を試みようとしていたことを思い出したからだろうか。

いや、記者にありがちな単なるやじ馬精神のなせるわざか。

彼は白い頭のひとりの男を思い描く。大量生産大量消費大量廃棄経済に背を向け、都会から離れた奥地でひたすら自給自足の生活を営みつづけてきたひとりの男がいま、現代文明がもたらした地球温暖化の被害者として、首都圏島とともに海中深く沈んでいくのだ。男は自給自足の生活を維持し、命を支えてくれた土地から決して離れることはないだろう。土地は男の命そのものだった。

遠くでヘリコプターの爆音がした。爆音が近づいてくる。

彼は迷っていた。取材に行くべきか。避難を勧めるために男の自給自足の地を訪ねることは、喪服を着て小さな花束を手に葬儀に出向くようなものではないか。どんなに素晴らしい花束を携えようと、死んでいくものには慰みとならない。自給自足の地とともに海に沈む男にどんな言葉が似付

かわしいのか、彼には思いつかなかった。

## 18

「もしかしたら、白頭大人先生の農園辺りが本州に取り残されているらしい……」

ヘリコプターに乗り込んできた斉木が佐藤の顔に向って大声を出した。

「え？　ホントか……」

「あの辺には亀裂が無数に走っていたので、本州との切断境界も複雑に入り込んでいるところですよ。行って確かめてはどうですか」

迷っている佐藤に円山という中年の操縦士が口を挟む。

「じゃ、お願いしますか」

彼は同意を取るように一度斉木を振り返ってから、操縦士に顔を向けて合図する。

ヘリコプターは上昇すると、西へ向う。一端、首都圏島の西側海岸に出て、海岸線に沿って北上するという。

眼下に海岸線が現れた。次第にあらわになってくる本州との切り口は彼が想像していたものとはかなり違っていた。首都圏島は巨大な力で本州から引きちぎられたはずなのに、上空から真下に見える海岸線にはそんな痕跡が見当たらないのだ。それに、不思議なことに、首都圏島の西部海岸線には関東山地に連なる一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートルクラスの高い山々がなかった。

東京沈下がはじまった当初、関東平野に走った亀裂はかなり広範にわたっていた。北から南に走る西側の亀裂は西部山地を横切り、山間部を縫うように走った。

このことが頭にあったせいか、彼は首都圏島の西側が前橋辺りから秩父を越えてほぼ直線で南下する線で本州からすっぽり切り離されているものと思っていたのだった。

だが新しくできた海岸線はそれよりもかなり東側へ寄っている。西側海岸線は当初の亀裂から東南の方向へ転じ、低地を南下し、相模川河口へ抜けているらしいのだ。

首都圏島は関東山地の高い山々を本州に残してきたというのか。それとも、高い山々は移動の途中で崩壊し、海中へ崩落してしまったのだろうか。

「マルさん、この海岸線ははじめからこうだった？」

彼は北側もかなり東京寄りになっているかもしれないと思いながら、操縦士の後ろ姿を見た。

「おい、あれは御岳山じゃないか……」

斉木が大声を発し、前方を指差す。

前面に小高い山並みが見えた。そこだけがはみ出すように、海岸線が海のなかへ膨れてる。奥多摩の一部か。

当初の亀裂に沿って本州と首都圏島の分離がはじまっていたのだろうか。海岸線が前橋辺りから秩父へ向って走っていた亀裂よりもかなり東寄りだということは、途中で方向を変えながら関東山地を避けて相模湖へと向かったのか、それとも最初からそれよりずっと内部の方で首都圏島が本州から切り離されたということなのか。

ヘリコプターは高度を下ろした。海岸線に間近に迫ると、海岸線の様相ががらりと変わった。上空から殆ど切断の痕跡が見えなかったのに、斜め

下に見える本州との切り口には地層が剥き出しになり、絶壁状の海岸線が延々とつづいていた。ところどころで崖崩れを起し、岩石や土砂が落ちている。

「で、白頭大人先生はどの辺に……」

「御岳山の近くということだったが……」

「すると、そろそろ先生の農園が見えるかも……」

海岸線は秩父山地の東端から奥多摩の東部先端を切り取り、檜原をかすめるように延びている。

「あれは御岳山じゃないんじゃないか……」

斉木が自信なさそうに呟く。

「マルさん、前方の山を中心に旋回してくれませんか。あの小高い山の周辺に農園らしきものがあるらしいのですが……」

ヘリコプターは高度を下げ、旋回しつづける。森林のなかにバンガローの屋根らしいのが見える。さらに範囲を広げて旋回するが、農園らしいものは見当たらない。

風が出てきた。夕闇が迫る。

「そろそろ帰らないと……。奥多摩の殆どが国立公園のエリアに入っている。御岳山もそのなかに入っているので、キャンプ地や一般の農園なら、奥多摩の東側から青梅に入ったところか、あるいは、檜原村の方かもしれない。そっちを一回りしてから帰りましょうか」

返事を待たず、ヘリコプターは高度を若干上げて、大きく旋回しはじる。

もし、農園が見付かれば、降ろしてもらい、明日迎えに来てもらおうかと思いながら、彼は窓から森林がつづく地上を見下ろしていた。ところどころに地肌を剥き出しにした山崩れの痕が見える。

どこにも農園らしきものはなかった。

操縦士の声がした。帰路についたらしく、ヘリコプターは急に高度を上げていく。海岸線が左手に現れた。

「さっき見えたバンガロー付近で着陸できるところはありませんか」

斉木は大声で操縦士に話しかける。

「おい、どうした……」

「オレ、降りて探したいのだ」

「ホントに、いいんだな。今日、帰れないことになってもいいんだな」

彼は何度も念を押す。斉木は大きく頷く。

「マルさん、降ろしてくれませんか。御岳山らしい山近くの国道沿いに小学校か中学校があったようだけど、校庭に着陸できませんかね」

「了解」

ヘリコプターは高度を下ろし、首都圏島の西岸に接近する。ぷっつりと切断された国道が崖の上に現れた。海岸線から二、三〇〇メートルのところに小さな校庭が見れる。

ふたりは降りる準備をはじめた。

砂塵が舞った。

ふたりが地上に降り、ヘリコプターから離れる。ヘリコプターは爆音を響かせ、去っていった。

# 第三章

## 19

「九十九里浜の砂浜がなくなったそうだが……」

遠浅の砂浜に大異変が起きていた。だが、展望台からの眺めは以前と殆ど変わりがなかった。

すっかり頭髪が薄くなった小柄な老いた男が海の方を見つめたまま、呟くように言う。隣の老いた女に聞こえているのか聞こえていないのか全然お構えなしに同じことを繰り返す。

「砂浜はまだあるのかしら……」

老いた女の細い声が風に吹かれて消えていく。

東京沈下がはじまる前、ふたりは何度も九十九里浜へ行った。車で三〇分程で砂浜に出る。延々とつづく砂浜は夏には大勢の海水浴客で賑わうが、それが過ぎると、ウソのように閑散としてしまう。太平洋からの波が打ち寄せる遠浅の海岸はサーフィンやウインドサーフィンを楽しむ格好なところだが、夏のシーズンが過ぎるといつも人影がまばらだった。ふたりは砂を蹴って波打ち際を歩いた。

夫が仕事を辞めて引退したとき、妻の希望で、老夫婦は都心のマンション暮らしを止め、海の近いところに戸建ての家を購入することにした。

海に近い丘陵地帯に建設された団地で格好な中古物件を見付け、老夫婦が越してきたのが東京沈下がはじまる前の年だった。この地を選んだもうひとつの理由は、隣接して国際カントリーの会場にもなる広大な公園があることだった。

公園の中央には海の見える展望台がある。新居から片道一キロ程ある展望台までのコースが老夫婦の毎日の散歩コースとなった。

展望台は海抜一〇〇メートル程の高台にあって、数キロメートル前方に円周形に延びた九十九里浜の地平が一望できた。海の見える東側は深い崖になっていて、真下に大きな用水用の貯水池があって、前面に田んぼが広がっている。田んぼの横を走る国道筋には人家が連なり、マンションや大型店のビルも散在していた。

「いつになったら、救助隊がやってくるのか……」

「やはり、もっと早く移住していたほうがよかったかな……」

「国は、県や市はなにしているんだ……」

「そろそろ海岸辺りまで行っていたほうがいいのかな……」

「いまさらじたばたしてもはじまらない……」

いつもなら、老夫婦が散歩する夕方には展望台に殆ど人影がなかった。だが東京沈下がはじまったころこら人影が増えた。首都圏が本州から切り離されて「島」となってからさらに増えた。テレビで見るヘリコプターからの映像ではもの足りないのか、それとも自分の目で確かめたいのか、何時来ても展望台には十数人が群がり、海の方を見つめてぶつぶつ言い合っているのだ。

「地球はやはり丸いんだ」と口癖のように言い合っていたことも忘れて、前面に広がる地平を見つめたまま、転落防止の竹柵のまえにじっと佇んでいる老夫婦には、聞こうとしなくても話し声が耳に入ってくる。

だがいつも夫婦で交わしている会話と同じだった。

都心マンションを出るとき、田舎へ帰ることも話し合ったが、結局、こ

の地を選んでしまった。あのとき、田舎へ帰っていれば、こんな思いもしなくて済んだのにと何度思ったことか。

東京沈下がはじまっても、僅かな貯えを叩いて買ったばかりの新居を手放し、田舎へ帰ることは考えられなかった。買った価格では売れないし、安く売ってしまえば、もう二度と家を買うことができない。ふたりは沈下する土地にへばりついて、毎日ひたすら沈下が収まることを祈った。

五年を経過して、老夫婦は東京沈下が収まったのかと思った。

その矢先、突然、首都圏が動き出した。本州から切り離され、海底を滑走するようにして沖合へ移動したのだ。全く予期しないことだった。

「早く、田舎へ帰りたい……」

一人が呟く。

遠くで、ヘリコプターの爆音がした。

一斉に、空を見上げる。小型ヘリコプターが一機、近づいてきた。だがすぐ離れていく。

大きな溜息が漏れた。

## 20

首都圏が本州から切り離され、「首都圏島」となって二日目を迎えた。

負傷者、病人や乳幼児など、緊急を要する人びとに対して、ヘリコプターによる救出活動は始まっていたものの、二〇〇〇万人の住民に対する救出計画は思うように進捗していなかった。

大量の避難民の輸送には船舶が欠かせないが、首都圏島海岸には船舶の接岸が容易でなかったのだ。首都圏島が海底を滑るように移動したので地上には激しい衝撃がなかったものの、首都圏島周囲の海岸や海底の地形が変形し、いままでとは全然違ってしまったからだ。

東京湾内の航路はすっかり埋まり、大型船の運航はできなかった。他の大小の港湾も同様だった。また本州と切り離されてできた海岸には絶壁のような深い崖が連なり、船舶を寄せ付けなかった。

とりあえず、沖合に大型船を停船させ、浅い海でも接岸可能な艀や底の浅い小舟あるいはホーバークラフトタイプの小型船舶を用いて避難民を運び、本州へ輸送する方法で救出活動が開始されることになった。だがこれは避難民、ことに年老いた避難民にとっても、また、船舶側にとっても危険で過酷なものだった。

というのは、本州との切れ口にできた首都圏島の新海岸は地形が厳しく、艀や小舟が直接接岸できるところが少なかったからである。そこで従来の海岸のなかに接岸できるところを探して利用することになったが、これらは太平洋に面しているため、大海流黒潮に流れる沖合では海が平穏なときでもかなり波立つのだ。台風や低気圧が通り過ぎるときともなれば海はしけ、高波が荒れ狂う。

一方、本州と最短距離にある新海岸に大型船用仮設岸壁の建設が突貫工事で進められていた。だがこのほうも思うように進捗しなかった。まず、適地があるようでなかった。崖のような海岸の地形や地質も問題だったが、首都圏島側には大量の避難民を集結させることができるところがごく限られていたのだ。

時間がなかった。

夏に向って、日増しに陽射しが強まり、ぐんぐん水銀柱が上りだした。

風はあったものの、すぐ狂風となって、荒れ狂う。毎日のように、短時間であるが、滝のような雨が降る。雨が上がると、まえにも増して強烈な陽射しが射るのだ。

傷だらけだったライフラインがついに完全に機能不全に陥ってしまった。

水道はもともとダメだったが、代わりの井戸がおかしくなった。以前はどこを掘っても真水が出たが、塩を含むようになったのだ。地下水に海水が入り込むようになったらしい。

まがりなりにも供給がつづいていた電気もストップ状態になった。それでもビルや事業用の自家発電装置は稼働していたし、太陽光発電や風力発電といった自然エネルギーは健全であった。

下水道は破壊されたままだった。破壊されたところから、下水や糞尿が溢れ出し、異臭を放つ。

首都圏島の交通や物流が途絶え、日常雑貨が品薄になり、食料事情が著しく悪化しだしていた。ゴミ回収が滞り、方々にゴミの山ができた。腐敗したゴミから悪臭が漂う。ハエが群がり、野犬や野良猫がうろつく。蚊が大発生した。

二〇〇〇万人に飢餓が迫りつつあった。感染症の危険が忍び寄っていた。

首都圏島は一歩一歩地獄の様相を呈しはじめていたのだ。

## 21

「あそこだ。煙が……」

斉木が指差す方に古びたバンガローがあった。確かに、煙突から煙らしいものが立ち上っている。ヘリコプターの爆音に集まってきた年老いた村人のひとりが奥のキャンプ場に白髪の老人が住んでいると教えてくれたのだ。

佐藤は斉木のあとについて、バンガローに近づく。ふたりはガラス戸が開けたままの窓から薄暗いなかを覗く。

バンガローは古い農家を模した囲炉裏のある造りらしい。燃えている囲炉裏の火の光のなかに、胡座をかき前屈みになって夕餉のつくっている痩せたひとりの老人の姿があった。火の上の鍋から湯気が立ち、火の周りに差してある串刺しの魚から魚の焼けた香ばしい匂いが辺りに立ち込めていた。

ふたりは入口へ回る。

「先生。白頭大人先生……」

斉木がノックし、ドアを開ける。

囲炉裏の火が老人の顔を照らしている。よく見ると、頭上に薄暗い裸電球がぶら下がっていた。

頭のうしろに白い長い髪を束ねた老人が顔を上げ、土間に佇むふたりを見上げた。顎いっぱいに生えている白い長い髭が揺れた。

窪んだ丸い目が笑った。

ふたりは囲炉裏端に座り込む。

「きみたちは……」

しばらく、老人はしげしげとふたりの顔を見ていた。

「……斉木くんと佐藤くんだったね。それで、こんなところに、一体、何しに来たんだね」

ふたりは互いに顔を見合わせる。そして同時に「先生こそ、ここで何を

なさっておられるのですか」と言う。
老人は目を一層丸くして、ふたりを見ている。
「もう、すぐ海中へ沈みます。早く、避難なさってください」
佐藤は老人を見た。老人は火の側の灰に刺してある魚の串を回した。焼けた魚の背に油が光る。
「もう焼けている。食べなさい。イワナだ。うまいぞ」
老人は灰から串を抜いてイワナを食べはじめた。
佐藤が手を伸ばすと、斉木もイワナをとった。
串刺しのイワナにかぶり付き、もくもくと口を動かす三人を囲炉裏の火が照らした。頭上の裸電球が微かに揺れている。囲炉裏の周りが板の間で、その奥に、布団が敷いたままになってる部屋があった。
「きみたちは……、役人と新聞記者か。それで……」
イワナをあらかた食べ了えた老人は串からイワナの頭と骨を外し、火の上の鍋のなかに放り込んだ。蓋を開けたとき、鍋からみその匂いがした。
「ダシが出る」と言い、目を丸くしているふたりに、老人は食べ了えたイワナの残骸を鍋に入れるように促す。
「先生の農園はどこですか。取材に伺ったのです、わたくしは……」
佐藤は鍋のなかへイワナの頭を放り込みながら、老人に目を向ける。自給自足しているはずなのに、そばに農園らしいものがないのが気になっていた。ひとりで気侭な隠遁生活を送っているだけなのか。
「農園ね。あれは五年前に止めにした」
「東京沈下がはじまって、すぐですか」
「そうだ。自給自足型農園経営を全国に普及させたくてね。一五〇人ほどいた弟子や同志たちを各地へ送り込むことにしたんだよ。ここにいては全員が東京沈下とともに玉砕することになってしまうからね。とにかく……」
老人はつぎのようなことを淡々とつづける。
人間はいつのまにか強欲に取り憑かれてしまった。強欲な人間は取り前を増やそうと、闇雲に供給を増やして需要を喚起し、儲けを増やそうとする。さらに大量生産大量消費大量廃棄を促して限りなく経済を成長させようと試みた。
だが有限な地球では資源も限りあり、実体経済を無限に成長させることはできないのだ。
にもかかわらず、この一〇〇年、ひとを騙してでも金儲けしようとする輩が増えつづけ、さまざまな規制を撤廃し、実体経済と乖離して増幅する「カジノ」経済システムを作り上げていく。そして世界恐慌（リセット）と世界戦争（再起動）を繰り返し、飽くなき金儲けに走るのだ。
「……世界人口の爆発的な増加と地球環境問題を出現させた現代科学技術文明のこれまた爆発的な巨大化高度化大量化で、人間活動の場である地球環境は幾何級数的に狭くなり、ついに容量を超えてしまった。もはや、地球においては人間活動によってなんらかの不利益（マイナス）なしに利益（プラス）を生みだすことができなくなった。トータルではいまや利益より不利益のほうが大きくなっているのだ。利益があるように見えるのは不利益を無視または放置しているからにすぎない。その証拠が地球規模の地球温暖化などの地球環境問題なのだ。それにもかかわらず、人間は強欲のかぎりをつくし、互いに食いあっている……」
老人はさらにつづける。
現代文明社会は崩壊へ向ってアクセルを踏んでしまった。たとえ沈下を免れようとも、東京のような超稠密な人口を抱える現代文明都市はいずれ

崩壊する運命にある。現代文明都市と運命をともにしたくなければ、ここから脱出し、新しい人間社会をつくるほかないのだ。
「先生の『自給自足型農園』がそのひとつの例示だというのですね」
斉木が口を挟む。
「その『自給自足型農園』の理念を広め、新しい人間社会を成就させるためにも、ここから早く避難すべきではないですか」
佐藤は老人をじっと見た。
「一体、どこへ避難しろというのかね。今回の東京沈下が発生しなくとも、関東平野はいずれ海中へ没するはずだ。関東平野だけではない。日本列島の沿岸部は、遅かれ早かれ、地球温暖化による海面上昇で大方海の中に沈むのではないかね」
「でも、とりあえず、本州へ……」
佐藤がしどろもどろに言う。
「で、この東京をどうしようというのかね。いや、この国を……」
遠くを見ていた老人が斉木に目を向けた。
「本州から切り離されたこの『首都圏島』には、いまだに二〇〇〇万人の住民が残っています。政府としては当面、彼らを救出して本州へ移送することに全力をつくすことになります。首都圏島はもうすぐ沈んでしまうでしょうから……」
老人は斉木から目を離し、「日本はもう沈んでいる」とぽつんと言い、あらぬほうを見ている。
「え？……」
斉木は口を開けたままだ。
「なぜ『日本はもう沈んでいる』と言われるのですか」
佐藤が怪訝な顔を老人へ向ける。
「そうだ。日本は東京沈下の発生で大ダメージを受けたが、これに対する対応策が問題だ……」
「どこが問題なのですか」
斉木が口を尖らす。
「対策と称してやっていることは、将来への構想なしに、全くその場かぎりのものにすぎない。首都東京が海中へ沈下すれば、日本が半身不随となり、富の大半を失うことになる。これらの物的損失もさることながら、それよりも問題なのはそこにいる四〇〇〇万人にもおよぶ住民が生活の場や活動の場を失い、難民化することだ……」
日本は二〇世紀に入って、富国強兵のもとで農業国から産業国へと変貌をとげるが、第二次世界大戦に敗れ、平和国家として再スタートする。それは単なる見せかけの再スタートに過ぎなかった。農業や林業などの社会や文化に根づいていた一次産業を犠牲にして、製造業など工業中心の産業構造に変え、輸出で稼ぐ貿易立国を目指し、世界第二の生産力を持つ経済大国へなっていく。
この一〇〇年の間、人口は約三倍に膨れ、現在、一億二〇〇〇万人を超えるまでになった。農村から溢れた人口が産業戦士として太平洋岸の工場ベルト地帯や大都市へ集中してきたのだ。
このような過程で形成された超過密集中集積超大都市東京がいま崩壊し、地上から姿を消そうとしている。突然生活や活動の場を失うことになるこの四〇〇〇万人の住民はどうなるのか。東京沈下の始まりから五年の間に、約半数の二〇〇〇万人が脱出し、新しい生活や活動の場を求めて各地へ散っていったというが、まだ二〇〇〇万人が残っている。この二〇〇〇

万を救出し本州へ移送するというが、そのあとをどうするつもりか。

これまで、大都市は地方から溢れ出た難民の受け皿となって集中集積の度を強め、超過密空間を形成してきたが、これが崩壊すればどうなるか。過剰人口の受け皿だった大都市が、今度はこれまでと倍加する行場のない大量の難民を一度に放出することになるのだ。かつての産業戦士にどこへ行けというのか。難民となったいま、彼らはどこを目指せばいいのか。

当面は、首都圏島沈没による二〇〇〇万人の住民の救済が問題だが、これで終りではない。このあと、日本列島の太平洋岸に連なる大都市には、これまた大量の難民を生み出す海面上昇や大地震の危険が控えているのだ。

大都市の崩壊とともに放り出された大量の難民が日本列島を徘徊し出したらどうなるか。

「……もし、中部圏や近畿圏の大都市群が海中に没するようなことになると、さらに数千万人の難民が発生するにちがいない。テント村やキャンプに収容された大量の難民は飢餓に襲われ、疫病に悩まされることだろう。これらの難民がいずれテント村やキャンプから抜け出し、集団で全国を彷徨いだすのだ……」

これらの難民問題を解決することができなければ、やがて日本全体が沈没してしまうことになるのだ。これは日本だけの問題ではない。地球温暖化による海面上昇が現実となれば、世界各地でこのような問題に遭遇することになる。この問題を解決するためには、世界はどうすればいいのか。これにはどうしても新たな世界規模の、いや、地球規模の構想が必要なのだ。

日本がこれまでの外需依存の輸出型産業構造の経済システムで成長を追い求めることはもはやムリである。資源制約、途上国の追い上げ、需要の減退などにより行き詰まりを見せており、もはや大量難民を雇用することも、救済することもできないからだ。

かといって、日本だけで問題を解決することは不可能だ。

世界的に食糧不足の傾向にあって、かつての穀物輸出国が輸出をしぶり出せば、穀物価格が幾何級数的に急騰することだろう。それでも食料を輸入できればいいが、やがて輸出国からの食料供給が途絶え、輸入すら覚束なくなるだろう。それに加え、いずれ海面上昇によって世界中の港湾施設が使用不能に陥り、船舶による物資の輸送が不可能になるのだ。

このような事態に立ち向かうには、いままでとは全く別の新しい考え方や構想が欠かせないのだ。

「新たな構想ですか……」

斉木が弱々しく呟く。

「そうだ。世界経済が従来のシステムのまま進めば、世界人口は八〇億人あたりがピークで、その後急激に減り出すことだろう。とことんまでに貪り尽くされた地球には過剰人口を養う余力が残されていないからだ。限界を超えた人口のもとで、地球環境が極度に悪化していき、やがて総崩れ的に激減するほかないのだよ。いずれ世界人口は急激に減少する。外需頼みの輸出本位の日本経済の崩壊はさらに早く、日本の人口減少も急激に進むだろう。とにかく、人類が絶滅しないためには、そのときに備え、人間活動をいまから地球の限界内にとどめ、地球と共生を図るはかないのだ……」

根本的な誤りは、強欲極まりない人間が有限な地球で無限の論理を振り回したことだ。そして、科学技術の巨大化高度化大量化を図り、自然征服を進め、自由競争といって弱肉強食を煽り、大量生産大量消費大量廃棄を極度に推し進め、食べきれないほどのものを食べさせ、さらに吐いてまた

食べることを強要し、われさきに地球を貪り尽くしていったのだ。こんな成長に成長を重ねるやり方に持続可能な社会を期待できるか。

新しい構想は無限の論理を排し、有限の論理を基本原理としなければならない。これまでの自然征服といった直線思考に代え、自然との共生を図る曲線思考から円環思考循環思考へと転換することだ。

「……このような基本原理に基づく構想がなければ、今回運良く、二〇〇〇万人を『首都圏島』から救出して本州へ移送できても、各地を彷徨する難民によって日本全体がやがて難民地獄に陥り、大量死を招くことになるだろう……」

「いまや、日本は沈没に至るじり貧の過程をたどりつつあるというのですか」

「そういうことだね」

老人は斉木に目を据え、大きく頷く。

囲炉裏の火が消えかけた。老人は囲炉裏の灰をかき、火種を集め、薪をくべる。煙が立ち上る。炎が立った。

老人は「疲れた」と言い、ごろりと横になる。しばらくすると、微かに寝息が聞こえてきた。

佐藤も老人に真似て横になる。考え込んでいた斉木もつづく。

天井から垂れ下がっている裸電球が微かに揺れた。

## 22

急に暑くなった。いままでとちがい、湿度も高い。微震動が相変らずつづいた。殆ど身体に感じられない地震動だったが、徐々に大きくなっていく。時折、身体に感じる大きな地震動が起きた。

いまにも大沈下が発生するかのような地震動が立て続けに襲った。

翌日、住民の間に「一週間後、首都圏島は海中へ没する」というデマが飛んだ。政府はテレビを通して必死に打ち消したが、デマは瞬く間に広がった。

一斉に、住民たちが本州に一番近い北側海岸を目指して歩き出した。四方八方から住民が集まりだした。なかなかはじまらない救出活動に苛立ちはじめていた住民たちが、デマを契機に、動き出したのだ。

「一週間以内に沈没するらしい……」

「海岸に救援船が来ている。早く行かないと乗れない……」

「南側海岸が沈みだしているそうだ……」

デマがデマを生み、炎天下の道路に住民たちの大行列ができた。政府、都や県はヘリコプターやパトカーを繰り出し行列を中止させようとしたが、大河のように流れる行列を抑えることは不可能だった。

行列の人びとはあとからあとに押し寄せるひとの波に疲れ果てても休むことができず、ひたすら歩き続けるほかなかった。十分な飲み水も食べものもない住民の間に気分を悪くするひとが続出した。年寄りや女子供に熱中症で倒れるひとが続出した。それでも行列はつづいた。

通過地点の市町村は飲み水や食べものを提供することしかできなかった。それもはじめのうちで、いつの間にか係の職員も行列に加わりだした。

後ろから追ってきた自衛隊の車や救急車もなかなか前へ進むことができず、立ち往生する始末だった。

ヘリコプターから行進制止を何度も呼び掛けるが、空からの呼び掛けは

なんらの効果もなかった。

行進の列が広がり、次第に長くなっていく。

最初は北側海岸に近い市町村の住民が主だったが、噂が噂を呼び、広い範囲の住民が行列に加わりだした。最後には、首都圏島全域から北側海岸へ向って住民が行進をはじめたのだ。

遠くからの住民は歩くこともままならず、自家用車で追いかけ、行列に加わろうとしたが、道路状態が悪く、車はすぐ動けなくなってしまう。道路のいたるところに動けなくなった車が列をなして立ち往生した。

首都圏島の北側と西側の海岸が本州までの最短距離にあったが、西海岸には険しい絶壁が連なり、船舶の接岸には適していなかった。これに対して、北海岸には低地も多く、切り口も比較的なだらかなところがあった。そこで仮桟橋用地として北側海岸が選ばれ、本州との直線距離約一〇キロメートルのところに、大型船接岸用の仮桟橋の建設が進められていたのだ。

住民たちはテレビでこのことを知っていた。

救出を待ちくたびれた住民たちはデマに煽られて行動を起こし、行進をはじめたのだった。誰もが誰よりも先に仮桟橋へ行って、首都圏島が沈没する前に接岸している大型船に飛び乗りたかったのだ。

だが仮桟橋は完成していなかったし、大型船も接岸していなかった。

住民が次から次に重なるように押し寄せ、海岸を埋め尽くしていく。制止を聞かずに押し寄せる住民の津波に先頭の住民たちは押されて前進を余儀なくされる。水際が目の前に迫る。

住民の長蛇の列がつづく。

ヘリコプターが頭上から行列の住民たちに前進制止を何度も呼びかける。炎天下、少しでも前へ進みたい住民たちには通じない。

人津波と熱中症の危険が刻々と高まっていく。

後方へ大型ヘリコプターが投入された。住民の行進圧力を抑えるために、行列に加わり、一歩でも前へ進もうと焦っている後方の住民をひとりでも多くヘリコプターに乗せて運ぼうというのだ。

だが大型とはいえ、ヘリコプター一機で輸送できる人員はかぎられている。最大で、大人なら五〇人、子供なら一〇〇人にすぎない。住民の行進圧力を抑えるには、少なくとも数十機、数百機が必要だった。

狭いところで、同時に大型ヘリコプターが離着陸するのは危険だった。空港、グランドやサッカー場などが臨時にヘリポート利用されたが、瞬く間に住民が押し寄せ、人の群れで埋まってしまい、着陸さえできなくなってしまった。

ヘリコプターは着陸地を求めて、上空を旋回ちつづける。

## 23

「危険だ」

テレビのまえで、佐藤は思わず叫んだ。

テレビは首都圏島からの中継画像を流していた。彼は首都圏島にひとり残してきた斉木のことが気になって、科学部のフロアにあるテレビにかじり付いていたのだ。

あの日の翌朝、目を覚ますと、老人の姿はなく、消えていたはずの囲炉裏で薪が燃えていた。しばらく待っても、老人は姿を現わさなかった。迎えのヘリコプターが来る時間が迫まっていた。突然、斉木が「残る」と言

いだした。彼は斉木を残してひとり帰ってきたのだった。
いくら待っても、斉木から連絡がなかった。
彼はなにやら胸騒ぎがして、取材の原稿も手に付かず、テレビで首都圏島の様子を窺っていたのだ。
海岸が住民で溢れている。水際の住民がいまにも海の中へ落ちそうになった。
制止を聞かない住民の動きを収拾しようと、迷彩服の自衛隊員が大勢で離れた海岸へ通じるバイパスへ行列を誘導しはじめた。だが新しい海岸もたちまち住民で埋め尽くされていく。
海岸一帯がひとで埋め尽くされた。
沖合に船舶が集合している。大型船の一隻が近寄ってきた。未完成の仮桟橋に接岸させるのか。
制止を聞かず、住民が仮桟橋へなだれ込む。後ろから突き落とされたのか、何人ものひとが海へ落ちていく。
「あっ……」
テレビに釘付けになっていた彼は、住民が海に落ちる度に、声を発しつづける。
遠くで、電話のベルが鳴った。
テレビに釘付けになっていて、誰もベルに気付かない。
画面に旋回する大型ヘリコプター群が映った。
次の瞬間、接触事故を起こしたのか、二機が絡み合うような恰好で落下し、地上に激突した。黒い煙が立ち上り、発火したかと思った瞬間、大きな火炎となった。
地上にいた住民が多数巻き込まれた。負傷者や死者が出たらしい。だが救急車も消防車も人の波に阻まれ、容易に近づくことができなかった。
ふたたび、電話のベルが鳴った。
ベルに気付いて振り返ると、机の電話が鳴っている。彼は急いで戻り、受話器を取った。
「斉木か……」
彼はてっきり斉木からの電話と思い込んでいたのだ。
「なにが起きているんだね、首都圏島に……」
受話器の奥からまだるこっい声が響いた。九鬼だった。
いまテレビに首都圏島が中継されているという。
「なんだって、テレビ中継だと……」
彼は驚きの声を上げる。
「誰がデマを流したんだ。厳罰もんだ」
彼から事情を聞いた九鬼が憤慨した声を出した。
「では首都圏島はまだ沈まないんだな」
「少しずつ移動しているようだけど、まだ当分はこのままだろうな」
「やはり、いずれ沈没するんだな」
「多分……。ところで、それよりも、海面上昇が迫っている」
「何だって、ホントか……」
「グリーンランドの氷床が大崩落寸前の状態だ。それとは別だが、いま熱帯域で低気圧が次から次に発生しているぞ」
「台風の卵か。台風に襲われたら、首都圏島はどうなる?」
「巨大な高波で、首都圏島の大半が水浸しになるだろう。さらに……」
「……」
「海面上昇が追い撃ちをかけることだろう。そのまえに、首都圏島が海溝

へ向って滑り落ちていくことになれば、そのときは巨大な津波が日本列島を襲い、世界各地を襲うことに……」

「ふん、そういうストーリーか」

「だがそれで終りではない。さらにつづく……」

彼はもう聞いていなかった。彼は受話器を耳から外し、電話機に叩き付けた。

## 24

二〇〇〇万人の救出活動は海と空から昼夜兼行でつづけられた。

最初にできた仮設岸壁から使用が開始され、首都圏島から本州への大型船によるピストン輸送がはじまった。

夜になって、風が出てきた。幾分涼しくなった。

乗船を待つ住民は道路に座り込み、いつの間にか、横になり眠り込む。多くは食べるものも飲む水さえ事欠く有様だった。

年寄りや子供には過酷な行進だった。彼らはへとへとになって倒れ込んだ。横になって眠りに落ちていく。なかには二度と起き上がることができない人もいた。

夜が明け、太陽が昇る。朝からじりじりとした真夏のような陽光が射す。

一夜が明けると、住民たちには行進してきたときの力はなかった。人びとは憔悴しきって、歩く力も衰え、順番が来てものろのろとした足取りで桟橋へ向う。足は重く、乗船するための船へのタラップを昇ることさえ容易でなかった。

船には飲み水や食べものが用意されていた。だが乗船して力尽きたのか、手渡されたペットボトルの水を飲むまえに倒れ込むものが続出した。

一方、衝突事故を起こした大型ヘリコプターによる救出作戦も、大勢の死者や怪我人を出したすえに、ようやく落ち着きを取り戻した住民たちの協力で、次第に順調に進むようになっていた。

救援ヘリコプターがつぎからつぎと飛来した。このことを知ると、住民たちはわれさきにヘリに乗り込もうとせずに、ボランティアの指示に従い、行列をつくって順番待ちをするようになった。

住民たちの救出活動が進められる一方で、首都圏島に不気味な巨大な黒い雲が近づいていた。熱帯域で発生した熱帯性低気圧が渦を巻き、次第に勢力を増しながら北上しだしたのだ。

熱帯性低気圧がフィリピン沖で台風となり、日本列島近海の高温海水域で巨大台風に成長するおそれがあった。

救出活動を担当する関係者が恐れていた事態が刻一刻と近づく。

## 25

「おい、あれを見ろ。海が時化てくる。そろそろ中止して戻ることにするか」

男は揺れる操舵室でハンドルを回しながら顎を突きだし、隣の若い男に話しかける。

前方に黒い雲が海面すれすれに垂れ下がって広がっている。

「うん、でも浜にはわれわれを待っている人たちが……」

ふたりはボランティアで、一〇人乗りの小型船を操り、住民の救出活動をつづけていた。
ボートを曳いた船が大きく右に回る。波が高くなった。太平洋だ。そこから首都圏島の東海岸を南下して九十九里浜へと目指すのだ。
「この波ではボートはムリだ。引き返すぞ」
首都圏島の東海岸にも直接大型船舶が接岸できるところはなかった。いくつかあった漁港の港湾設備はすべて破壊されてしまった。ボランティアのふたりは船を沖合に停泊させ、小さなボートで船まで住民を運んでいたのだ。
船は大きく旋回した。
「おい、あれはなんだ……」
海面一面が変色している。
「海岸が崩れて、土砂で海水が濁っているんですか」
若い男は振り返り、濁水の帯をたどる。
「それにしちゃ、濁りの範囲が広すぎる。海底の泥を巻き上げているのだろうか。一寸と調べてみるか」
「まえのときはこんな濁りはなかったですよ。でも、気付かなかっただけですか」
「確かに、まえはなかったな……」
男は若い男に目をやる。男は船を回した。
「……」
若い男は海面をじっと見ている。
「海の中が荒れているのか。それで砂が巻き上げられているのかもしれない」
「海の中だけが激しく荒れているのですか……」
若い男は不審そうな目で濁った海面を見ている。
船は濁りを辿っていく。濁りの帯は長く広い範囲に広がっていた。
「それとも、海底でなにかが起きているのかもしれない……」
風が鳴る。波の飛沫が散る。
男はエンジンの回転を上げた。

## 26

大粒の雨が降りだした。すぐバケツをひっくり返したような土砂降りになった。
道路に蹲る住民たちには雨宿りする所はない。雨に濡れるに任せるほかなかった。日傘を差したり、ビニールの簡易レンコートを取りだして羽織るものもいたが、凄まじい豪雨には大して役立たなかった。
道路に水が溢れた。側溝も下水管も壊れていた。
一面に水溜まりができた。深いところは三〇センチにもなった。
船舶と大型ヘリコプターによる救出活動はつづいていた。
南方で発生した熱帯低気圧が発達して台風となり、北上をはじめた。日本列島には東から高気圧が張りだしていたが、まだ弱く、台風をブロックすることは期待できそうになかった。
不運なことに、首都圏島が本州から南東へ一〇数キロ移動しており、高気圧の縁がこの辺りにあるのだ。
台風は勢力を増しながら、北上をつづける。フィリピン沖で若干西寄り

へ進路を変えた。このまま中国大陸へ向うかと思われた。
だが台湾に近づいたとき、突然動きを止めた。停滞したまま、まる一日動かなかった。その間、台風はエネルギーを蓄え、みるみる巨大な台風へと発達した。
ふたたび動き出したときには、超巨大台風となっていた。
西へ向うと思ったら、北上しはじめた。さらに東寄りに向きを変え、日本列島に近づく。
時折、殴りつけるように降る大雨のなかで、首都圏島から住民の救出活動は急ピッチで進められていた。接岸する船舶に住民たちは急いで乗り込む。満員になるとすぐ出航していく。つづいて新たな船舶が接岸する。住民たちが乗り込む。こうして救出活動が繰り返された。
次第に、風が強まる。時折、雨が混じった。
もはや、ヘリコプターの飛行は危険だった。仮桟橋に接岸中の大型船が激しく揺れ、タラップを安全に昇ることが難しくなった。乗船中の住民がタラップから海へ転落する事故が起きた。
台風が通過するまで、救出活動が中止された。
海岸付近には乗船待ちの住民たちの避難場所はなかった。テントの臨時救護所も台風に備えて撤去されてしまった。
海岸から一キロほど離れたところに空家や小学校があるが、乗船順番の先頭にいる住民たちはいくら促されても水浸しになっている道路から離れようとしない。
横殴りの風雨が容赦なく住民たちを襲う。時折、強い風が吹く。水面から水しぶきが立つ。ようやく、住民たちは水浸しの道路から離れ、安全な場所を探し出した。
台風が東北東に進路を変えた。
日本列島を覆う高気圧の縁を通って太平洋へ抜けるのか。高気圧の縁に位置する首都圏島はどうか。

## 27

「どうしたんだ……」
佐藤はいつまでも連絡してこない斉木にしびれを切らして怒鳴る。
「白頭先生がまだ帰ってこない……」
「それで囲炉裏端で待ち続けているというのか。いつまでそうやっているつもりなんだ。先生が帰ってくるとは限らない。われわれに愛想を尽かして姿を消したのかも知れないではないか」
「うん、でも……」
斉木はもう一度話を聞きたいという。
「台風が来ているので、当分迎えにいけないゾ」
彼は受話器を置くと、窓から空を見た。空一面に暑い雨雲が垂れ込めている。
大雨が降りだしたら、首都圏島はいたるところが水浸しになるにちがいない。避難中の住民は、そして白頭大人は大丈夫か。
それよりも首都圏島そのものが、大雨に耐えきれなくなって、全体が山崩れのように崩壊しだすことはないのか。彼はなにかが起きそうで心配だった。
それにしても、斉木はどうしたんだ。家族と顔を合わせるのを楽しみに

していた男が急に山の中に閉じこもってしまうとはどうしたことか。彼は斉木のこころになにが起きたのか、理解できなかった。
テレビに近づく。すでにヘリコプターによる首都圏島上空からの中継は途絶え、ビデオや地上からの映像が流れていた。
風が強まり、狂風が乗船を待つ住民たちを煽る。住民たちは雨宿りのできるところを探して水浸しの道路を重い足取りで歩く。
横殴りの大粒の雨粒がカメラのレンズを濡らすのか、映像が歪んでいた。
画面の端に、台風情報が流れている。
台風は日本近海にきて、さらに東寄りに進路を変えた。首都圏島は大きな予報円の中心に入ってる。このまま進めば、本州は逸れても、首都圏島を直撃することになりかねない。
彼はふと、九鬼の指導教官であり、義兄でもあった佐々木教授の命を奪った超巨大台風を思い浮かべた。東京に上陸した超巨大台風は東京湾の満潮時と重なり、東京都心全域を水浸しにしてしまったのだった。
もし大潮や満潮時に台風が接近すれば、首都圏島の大半が水没してしまうかもしれない。何キロも歩いて疲れ果てた住民たちに、襲い来る洪水に耐える力が残されているだろうか。雨に濡れた年老いた住民たちが心配だった。

## 28

「どこへ行っていたんだ、台風が来ているのに……」
受話器の奥から、九鬼の声がした。何度か、電話したという。
「また、超大型に発達しそうで……」
佐藤は弱々しく応える。
「元気がないな。首都圏島が動き出しているらしいゾ」
「え？　ホントですか……」
一瞬、斉木の顔が浮かんだ。
「首都圏島の東側の海が濁っているようだが……」
「海が荒れているから濁っているのじゃないんですか」
「うん、それも考えられるが、どうもおかしい。濁水の範囲が広すぎる。一度、調べてみたらどうかと思ってね」
「分かった。で、どうなるんですか……」
彼はあまり気乗りしなかった。
「気圧がとても低い巨大台風が来れば、吸い上げ効果がそれだけ強まるから、さらに滑りやすくなるかも知れない。そうなれば、首都圏島は加速して海溝への急斜面に近づくことになる。そして海溝へ向って滑り落ちていく」
「なんですって……」
彼は息を呑んだ。彼は首都圏島がいわば小康状態を保ってこのまましばらくじっとしていると思っていた。九鬼の一言がその思いを木端微塵に砕く。
「……」
佐藤の気持ちを察したのか、九鬼は黙ったままだ。
「で、海溝へ沈むのはいつですか」
彼は気を取り直して、九鬼の声を待った。
「いまのスピードでは三日もあれば、海溝への急斜面へ突入するだろう」

「そのあとは……」
「急斜面に到達すれば、あとはあっという間だ」
「すると、あと三日しか猶予がないというのですか」
彼は叩き付けるように、受話器に向って怒鳴る。
斉木と白頭大人の顔が浮かんだ。首都圏島にはまだ住民の大半が残っている。これらの人びとを乗せたまま、首都圏島が海中へ沈んでいくことになるのか。
「救出活動は進んでいるだろ……」
事態の深刻さに気付いたのか、九鬼の沈んだ声が響く。
「ああ……」
救出活動が昼夜兼行で続けられていたが、これまで一五〇万人も運んでいないにちがいない。まだ一八五〇万人が残されているのだ。
台風で中止させられている救出活動をすぐ再開しても、三日間で一八五〇万人を救出することは到底不可能だった。せいぜい五〇万人を救出できるかどうか。
「もしかしたら、こちらのデータが間違っているかも知れない。衛星からのだからね。一度、目で確かめて見てくれ」
九鬼は気休めのように言う。
「海水の濁りが広がっていれば、滑り出しているということですね」
「そうだ。こっちのデータが間違っていればいいのだが……」
受話器の奥から九鬼の溜息が微かに聞こえる。
「どうやって調べればいいんですか。台風が過ぎるまでヘリは飛べないし……」
彼には九鬼の気休めと分かっていても、それにすがりたかった。
台風が通過するのを待っていれば、一日、二日は過ぎてしまう。三日の余裕しかないのだ。どうすればいいのだ。
「とにかく、ヘリが飛べるようになったら、すぐ調べて見て知らせて欲しい。こちらでもう一度データを洗い直してみるから。いいね」
彼は切れた受話器を持ったまま、なんとかヘリコプターを飛ばす方法がないか考えていた。

## 29

日本列島周辺には三〇度を超える高温海水域が広がっていた。台風は日本近海に来てますます勢力を強め、中心気圧九一〇ヘクトパスカルの巨大台風へと発達した。
巨大台風は日本列島に上陸せずに、まるで首都圏島を目指すように、太平洋岸沿いを東へ進む。
台風が接近するにつれ、風雨が次第に強まり、海は高波を逆立て、飛沫を上げ、荒れ狂いだした。
各地から集まって救出活動に加わっていた数多くの船舶はそれぞれ台風対策に余念がなかった。小型船舶は臨時の岸壁や海岸に太いロープで何重にも繋がれて固定されて係留されていた。大型船は沖合に出て台風の通過を待つのだ。
荒れ狂う高波がつぎつぎと襲う。係留してある小型船のロープがつぎつぎに切れ、高波にさらわれていく。転覆したり、流されて座礁する船舶が続出した。

仮桟橋や仮設岸壁が高波に洗われ、大きく揺れる。
高波の飛沫や海水が陸地の奥にまで達する。首都圏島はまるで荒海の真っ只中に取残された小舟のように、荒れ狂う高波に翻弄された。
巨大台風の目が近づくにつれ、海水が吸い上げられて海面が急上昇した。仮桟橋が持ち上げられてばらばらになった。
高波に首都圏島が洗われ、海水が低地を襲う。
突然、雨が止み、風が凪ぎる。首都圏島が巨大台風の目に入ったのだ。
首都圏島の東京二三区や千葉、神奈川、埼玉の低地が水を被り、海中に姿を消していた。
つぎの瞬間、首都圏島が僅かに宙に浮いた。しばらくの間、首都圏島全体に長周期の揺れが襲った。
これが合図だった。
太平洋へ抜けていく巨大台風に引き摺られるように、首都圏島が東南へ滑るように動き出した。

## 30

「園部さん、首都圏島になにか異変がありませんか」
佐藤はヘリコプターによる濁水調査ができず、気が気でなかった。九鬼の電話から一日が過ぎていた。
彼はまえに東京沈下の亀裂の状態を一緒に調べに行った少壮の地震研究者の園部を思い出し、藁をもすがる思いで電話したのだった。
「どうしたのですか」
はじめは素っ気無い応答だったが、佐藤のことを思い出したらしく、しばらくしていつもののんびりした声になった。
彼は九鬼から聞いたことを掻摘んで話した。
「そうでしたか。実は、ボランティアで救出活動を行なっている友人のひとりが首都圏島の東海岸付近にかなり大きな海水の濁りがあったと知らせてきました。もしかしたら、それかもしれません……」
「いつ、見たのですかね」
「あれは確か、台風の影響が出て、救出活動を中止した日だったですね。小型船で住民を運んでいるのですよ」
「すると、三日ほど前ですか……」
彼はしばらく考え込む。
「ところで、園部さんはどう思われますか、その濁りのことですが……」
「さあ、首都圏島が滑り出して土砂を巻き上げているのかどうか……。でも、かなり広い範囲で海水が濁っているとすれば、海底でなにかが起きているということですかね……」
「原因として思い当たることは……」
「首都圏島自体が滑り出して土砂を巻き上げているとも考えられるけれども、首都圏島の付近で大規模な地滑りが起きたのかもしれませんし……。とにかく、いろんなことも考えられるので、見てみないと何とも言えませんよ」
園部はなぜか歯切れが悪い。
「台風一過を待つほかないか」
彼は呟くように言って、電話を切った。
大粒の雨粒が窓ガラスを叩き付ける。彼はぼんやりと黒い雲が流れてい

くのを見ながら、やはり自分で確かめるほかないかと思った。

## 31

翌日、朝から強烈な太陽が首都圏島を射した。

救出活動が再開されたが、船舶による救出活動はすべてはじめからやり直す必要があった。仮桟橋は完璧なまでに破壊されてしまっていたし、船舶も被害を受け、多くが転覆したり、座礁してしていた。、無傷な船舶一隻もがなかった。

当面、船舶による救出活動は断念し、ヘリコプターによる救出に頼るほかなかった。

雨の中を過した年老いた住民の衰弱が酷かった。暑さが加われば、熱中症患者が大量に発生するおそれがあった。

大量のヘリコプターは投入された。

直接本州へ搬送するほかに、沖合に大型船を停泊させ、首都圏島とのピストン輸送も行なわれた。

その間に、仮桟橋の補修も進み、各地から応援の船も到着して、船舶による救出活動が再開された。

佐藤は救出活動が再開されたことを確認すると、台風一過の首都圏島と救出活動状況の写真撮影のヘリコプターに便乗することにした。

九鬼の電話から三日目だった。予測通りなら、首都圏島が海溝への急斜面に接近しつつあるはずだ。

彼はこの三日間ずっと悩んでいた。首都圏島がもうすぐ海中へ没することを知らせるべきか、迷いつづけた。どんなにもがいても、三日間で一八五〇万人を救出することは不可能だ。二日間は台風の通過を待たなければならなかった。救出活動に残された時間は二四時間しかなかった。

彼は九鬼の首都圏島沈没予測を無視することにした。いたずらに危機を煽ったところで、救出活動がこれまでの何倍ものスピードで急速に行なわれることにはならないし、かえって住民たちを混乱に陥れるだけにちがいない。

彼はじっと耐えた。お前は一八五〇万人を見殺しにする気か。こんな声を何度も聞いた。そのたびに、彼は気が狂いそうになった。だが口を閉ざして、ただ沈没予測が間違えであることを祈るほかなかった。

彼はせめて斉木を救いたかった。白頭大人を救出したいと思った。

「東海岸一帯に巨大な濁水があるらしい。それも撮影してはどうですか」

彼は写真部員に話しかける。

若い部員は笑顔で頷いた。

「マルさん、東海岸を回ってから、帰りにまえに降りたところで下りたいんですが……」

「御岳山の近くだったかね」

円山という中年の操縦士は気さくに応える。

ヘリコプターは台風で壊れた仮桟橋の上空にさしかかる。補修がつづけられる一方で、大型船が接岸を待っていた。強烈な陽射しのなか、海岸には住民の群れができている。地べたにしゃがみ込んでいるひとの姿が多い。

ヘリコプターは高度をとって、海岸に沿って東へ進み、首都圏島の東海岸を目指す。転覆した小舟や座礁した大型船が目に付く。

「あれは……」

若い写真部員が声を上げた。
「やはり濁水か……」
彼は願いがかなわなかったことに失望し、口の中で呟く。
「どうして濁水が生じているのですか」
「首都圏島が海底をかき混ぜているらしい」
「え？　首都圏島が動いているのですか」
「そう、かなりのスピードで……」
「どっちの方向へ進んでいるのですか」
「多分、東南かな」
「それで濁水海域がどうして東海岸にできるのですか」
「海流のせいだろう。すぐそばを黒潮が流れている。それにつられて濁水が東の方へ引っ張られて広がっているのだろう」
彼は若い写真部員と話すことでこころに迫る不安を忘れたかった。もうすぐ首都圏島は海溝への急斜面に到達するだろう。首都圏島の南から、救出を待っている一八五〇万人もろとも、一万メートルもある海溝の底へ滑り落ちていくのだ。
「それで首都圏島はどうなるのですか」
しばらく考え込んでいた若い写真部員がじっと彼を見た。
「……」
口の中がからからに乾いていた。彼は「海中へ没していくのだ」と言いかけて、口を噤む。
ヘリコプターは首都圏島の南端に達していた。房総半島の南端がもぎ取られ、三浦半島も一部か欠けている。
「マルさん、東京湾を北上していただけませんか」
「了解」
ヘリコプターは急旋回して、東京湾の上空へ入る。沿岸部が水没していた。さらに奥まで海が広がって、東京湾が一回り大きくなっている。
その風景を目にしたとき、一瞬、彼は首都圏島の南端がすでに沈みだしているのかと思った。
首都圏島が海溝への急斜面の入口に達し、やがて急斜面を滑り落ちていくのだ。
その瞬間、彼は全身に戦慄が走るのを覚えた。
「水没範囲が広がっていますね。台風で堤防が壊れたんですかね」
若い写真部員は無邪気にシャッターを切っている。
彼は「惚けたことを言うな。首都圏島はもうじき沈むのだぞ」と言いたかった。だが彼はきっと口を固く結び、じっと堪え、眼下を見下ろしていた。
水面に浮かぶビルの屋上で救出を求めて手を振る子供と両親らしい三人の被災民の姿があった。水没を免れた地上の其処彼処にもいまだ多数の住民が首都圏島から脱出しようと犇めいているのだ。
彼は身を乗り出し、じっと水に浸かっている首都圏島を見た。
首都圏島が海溝へ滑り落ちていくときが刻一刻と近づいている。
首都圏島が急斜面へ突入すればどうなるのか。急斜面に入ったところから首都圏島が海溝へ向って崩れ落ちていくのだろうか。あるいは首都圏島は海面へせり出ている南極大陸の棚氷のように海溝へせり出ていき、耐えきれなくなったところで大崩壊を起こすのだろうか。それとも首都圏島全体が一丸となって急斜面から一気に海溝へ向って滑り落ちていくのだろうか。

彼は気が気でなかった。
旋回していたヘリコプターが次第に高度を上げ、北上しはじめた。
彼の脳裏に斉木の顔が浮かんだ。斉木とは一度電話で話したときから連絡が取れなかった。白頭大人はどうしているのか。斉木は白頭大人と会ったのだろうか。
前方に丘陵地帯が現れた。遠方に山並みが見える。
「御岳山の近くでいいんですよね」
「ええ、でもコースが……」
彼には山肌を剥きだした山並みに見覚えがなかった。
「まえとは別のコースだが、一寸変ですね。山崩れでもあったのか……」
中年の操縦士がぶつぶつ言っている。
台風の大雨で、本州と切り離されて絶壁が連なる西海岸側に大規模な山崩れが起きたのだろうか。白頭大人のバンガローは大丈夫だったろうか。
山間にある小さな校庭が見えてきた。白頭大人を探しにきたとき、斉木とヘリコプターから下りた小学校の校庭だった。あのときはヘリコプターの爆音を聞きつけて、村の住民たちが集まってきたが、人影はなかった。
「佐藤さん、明日もこの辺を飛ぶ予定があるので、連絡して下されば、迎えに寄りますよ」
「ああ、どうも……」
彼はヘルメットを外し、キャビンのドアを開いた。
「あ、ライフジャケットは借りていくよ」
彼は身に付けていた救命胴衣を着たまま、砂塵が巻き上がる校庭へ飛び下りると、身を屈めてヘリから離れる。
ヘリコプターがすぐ離陸し、上昇する。ぐんぐん上昇し、北を目指して遠ざかっていった。
彼はしばらくヘリコプターが去っていった方の空を見ていた。ヘリコプターの機影が消えると、あたり一面から音も消え、まるで死んでしまったかのようだった。
彼は周りを見渡した。耳をすましたが、人声はなく、森閑として人の気配さえ全く感じられなかった。

## 32

バンガローには斉木の姿はなかった。白頭大人の姿もなかった。
囲炉裏には火がなかった。灰は湿気を帯び、何日もの間、火を燃やした痕跡がなかった。
佐藤はバンガローの周囲を歩き回り、なにかふたりの手掛かりとなるものがないか探した。付近に点在するバンガローを覗く。
人の姿も気配もしなかった。
大声を出して、呼びかける。返事がない。
水汲みに行ったことのある沢へ下りていく。台風のせいか、水が濁っていた。なぜか、流量が減っている。上流で土砂崩れがあったのか、それとも大雨で土砂が流れ込んだのか、土砂も溜まっている。
彼は気になって、沢を登って、上流へと足を運ぶ。
杉林を通り抜け、頂上を目指す。
ところどころで杉の木が根刮ぎ倒れている。
「あ、地割れだ」

山崩れが起こる前兆にちがいない。彼は足がすくみ、身体を動かすことができない。じっと立ちつくしていると、すぐ近くから音が聞こえてきた。

彼は耳をそばだてる。地鳴りのようにも聞こえる。波の打ち寄せる音のようでもあった。それとも、山崩れがはじまる前兆音だろうか。

彼は首都圏島が軋み、悲鳴を上げているのかもしれないと思った。

首都圏島がいまだ救出されずに取残されている一八五〇万人の住民を道連れにしなければならないことを嘆いているにちがいない。彼はこう思いたかった。

突然、人の声が混じる。

彼は斜面を昇りはじめる。斜面の向こうから人の声がしたように思った。

薮を掻き分け、頂上へ出る。

絶壁の頂だった。下の方に白い波頭の波が打ち寄せている小さな砂浜があった。絶壁に沿って土砂崩れでできた小さな砂浜が連なっていた。

よく見ると、多くのひとが動いている。長い木を集めて筏を組んでいるのだ。

すでに組み上がった大きな筏が砂浜に点々とあった。

彼は米粒のような人びとのなかに白頭大人や斉木が混じっているにちがいないと思った。砂浜に下りていって、斉木の背を叩きたかった。だが彼には下りていく方法が分からなかった。砂浜への道も見付けることができなかった。

彼はバンガローに戻るほかなかった。一晩、バンガローで斉木が戻るのを待とうと思った。もし斉木が戻ってこなければ、迎えのヘリコプターに乗ろうと思った。

薪を集め、囲炉裏に火を焚いた。炎を見ているうちに眠くなって、彼は横になった。そのまま、彼は深い眠りに落ちていった。

何時間眠っていたのか。彼は突然の揺れに驚いて、目を覚ました。遠くで地鳴りのような音がする。

彼は外へ出た。真っ暗な暗闇のなかに仄白い光が走った。大きな音響とともに、裏山で大規模な山崩れが起きた。

彼は遠くへ引き摺られていくように感じながら、気を失っていった。

# 第4章

## 33

「いま、千葉東方沖を震源とする地震があったらしいが……」
園部はディスプレーを覗いてデータをチェックしている同僚を振り返る。
「そうですか。でも、気象庁の発表は……」
仕事を邪魔されたせいか、不機嫌そうな返事が返ってきた。
担当官の発表はまだなかった。地震発生の発表がないのは軽微な地震動だからか。それとも見逃したのか。見逃すようなことはまず考えられない。やはり軽微だからなのだろう。
園部は自分を納得させようとするが、気掛りがなかなか消えなかった。彼の頭には佐藤から聞いた「首都圏島が三日ほどで海溝へ落ちていく」という九鬼の予測が巣付くっていて離れなかったのだ。
あの軽微な地震動は首都圏島が日本海溝へ滑り落ちていく地滑りのときのものではなかったのか。
「おい、津波がくる。早く、屋上へ上がろう」
園部は同僚に声をかけると、研究室を出た。

首都圏島が海底の急斜面傾を滑り出した。次第にスピードを上げ、しゅるしゅると水を掻き分け、深みへ落ちていく。
首都圏島に海水が広がり、大きな音もなく、あっという間に全島が海中へ姿を消していった。

午後一〇時を過ぎ、一日の作業が終わった。救出活動を一時中断して、皆が深い眠りについていた。乗船できずに明日まで待たされた住民たちも眠りに落ちていた。
誰一人、異常に気付かなかった。

一端、潮が引いた。全国各地から救出活動に駆けつけた無数の船舶が潮に引き摺られ、勢いよく沖へ流されていく。
流された船と船が勢いよくぶつかった。尖った船首が船腹へ突き刺さる。火花が散った。油が流れた。
船舶の衝突が相次いだ。海中へ吸い込まれて転覆したり、岩に衝突して破損して沈む船が続出する。
つぎの瞬間、急に海面がせり上がった。水の壁ができた。夜目にも鎌首のように垂直に立てた白い波頭がほのかに見えた。
水の壁を押し立て、海水の塊が進む。
数分後、巨大な津波が落雷時のような轟きを響かせ、本州を襲った。
第一波が過ぎ去ったあと、津波は繰り返して発生し、何度も襲った。第二波は第一波より大きかった。津波は小さくなってはまた大きくなった。
直ぐ、津波の発生が各地へ知らさせた。
津波警報が発せられた。直ぐ、大津波警報に変わった。

## 34

二度、三度と襲ってきた巨大津波も、翌朝になって、漸く収まりをみせ

た。
本州から切り離されてひとつの島となった首都圏島の姿がなかった。目の前に浮かんでいたかっての関東平野「首都圏島」の姿は海上からすっかり消え失せていた。
関東平野がえぐり取られ、新たにできた本州の新海岸には船舶の残骸、壊れた家の柱や板切れ、倒木、車など雑多なものが無数に打ち上げられていた。
救出者の一時収容用に海岸に設置されていた数千張りものテントは、数十万人の収容者もろとも流され、一張りも残っていなかった。
一面にゴミや木片、破損した船や倒壊した家屋の残骸が散乱した海岸には、また激しく損傷した夥しい数の遺体が残されていた。なかには傷を負って動けない重傷者も多くいた。
海岸に集まってきた人びとには手足に怪我をしているものも多かったが、ゴミや残骸を片付けて生存者を探したり、重傷者に応急措置を施したりしていた。
遠くから救急車のサイレンが近づいてくる。
一方、首都圏島が消え、急に広がった海面にも船や家屋の残骸、バスや乗用車、丸太や柱に板切れなど、様々なものが浮かび、岸に向って打ち寄せてくる。そのなかに遺体や助けを求めるひとの姿もあった。
頭上をヘリコプターが旋回し、生存者の救出をはじめた。船が近づいてくる。ヘリコプターに釣り上げられた生存者が船に運ばれていく。ボートが下ろされ、海面に浮かぶ遺体や生存者を拾い上げる。
関東平野がもぎ取られてできた新海岸はL字型の地形で、巨大津波をさらに増幅していたのだ。右と左から交わるL字の曲がり角で、左右から押し寄せる津波が中央に集中して盛り上がり、数十メートルに達したらしい。
数十メートルの巨大津波は港湾施設や建物を打ち壊し、臨海の高層ビルの壁を駆け登った。畑や原野を駆け抜け、道路の車を襲い、海岸から数キロ離れた建設中の新都市や新首都に押し寄せた。新築の家屋が壊され、街路樹がなぎ倒された。
辺り一面に泥にまみれた丸太や根刮ぎになった樹木、破壊された家屋の残骸、車などが散乱していた。これらの現代文明の残骸とともに、ここでも数多くの遺体が見付かった。
巨大津波は新海岸を襲っただけではなかった。第二波、第三波と押し寄せるなか、巨大津波は世界各地を襲っていった。
日本列島の太平洋岸のいたるところへ巨大津波が押し寄せ、臨海都市を総なめにしていった。
日本列島だけではなかった。
ハワイの太平洋津波警報センターはいち早く世界各地へ向けて警報を発した。
巨大津波は太平洋を渡り、相次いで太平洋に面した各地を襲った。
巨大津波は超スピードでハワイ諸島を襲い、北米大陸と南米大陸の西海岸を襲った。中国、極東ロシア、東南アジア諸国を襲い、オーストラリア大陸、ニュージーランド、太平洋に浮かぶ数多くの島々を相次いで襲った。

## 35

「あのぉ……、佐藤さんが着ていたライフジャケットには発信機がついて

いなかったのですか」

若い写真部員はヘリコプターに乗り込むなり、操縦席に近寄り、佐藤の捜索をしたいという円山の耳元で大声を出した。

「ライフジャケット？　あ、そうか……」

円山は昨日御岳山の近くで下ろした佐藤を今日迎えに行く予定だった。だが昨夜首都圏島が沈没してしまったのだ。

彼は動転して、佐藤が備品のライフジャケットを着たまま下りたことを忘れていた。備品のライフジャケットには発信装置が装備してあった。入水すると自動的にSOSの信号を二四時間発しつづける。

もし、ライフジャケットを着けておれば、首都圏島が海中へ沈んでいくとき、佐藤が海面に浮かび上がったかもしれない。ライフジャケットが海面に浮いていれば、いまも信号を発信しているはずだ。

ヘリコプターは離陸すると、高度を上げ、南下する。

首都圏島の姿はなく、静かな海が一面に広がっていた。波間には浮遊物が点々と浮き、ゆったりと揺れている。無数の船が出て、浮遊物を掻き分け、生存者の救出や遺体の回収をはじめていた。

高度を下げていく。

撮影ポイントを探して、ヘリコプターは旋回しつづける。

円山は操縦桿を機械的に動かしながら、耳につけた受信機のイヤホーンに神経を集中する。雑音のなかにSOSの信号が潜んでいないか、耳をそばたてる。

雑音だけだった。

撮影を了えたという合図に、彼は機を大きく旋回させ、高度を上げて黒潮を追う。もしかしたら、黒潮に流されているかもしれない。早く追いつかないと、どんどん先へ流されて行ってしまう。いや、巨大津波に流されてずっとその先へ流されて行っているかもしれなかった。

燃料のことを考えると、気が気でなかった。燃料切れで、今度は自分のライフジャケットがSOSを発信することになりかねない。

「SOSの信号じゃないか」

若い写真部員が素っ頓狂な声を発し、円山の背を突っつく。

「ん？……」

若い写真部員がイヤホーンに人さし指を突き立てている。

確かに、SOSの信号だった。

高度を下げる。

波間に、かなり大きな浮遊体が浮いている。

「筏らしい。ひとが乗っている……」

波間に見え隠れする丸太を組んだ筏に十数人の人影があった。

二人は頷き、手を振る。

「燃料がないから、近くにいる船舶に救援を要請して、一端、引き返す」

「了解」

途中、海上保安庁の旗をなびかせ、救援に向う巡視船が見えた。ヘリコプターは旋回して場所を知らせる。

巡視船からボートが下ろされた。筏に近づき、ロープを投げる。

筏が曳航されるのを確かめて、ヘリコプターは高度を上げた。

ヘリコプターが屋上のヘリポートに下りたとき、すでに燃料計の針がゼロを示していた。

## 36

首都圏島の沈没と巨大津波によって、日本だけで犠牲者は二〇〇〇万人を超えた。

首都圏島に残っていた二〇〇〇万人の住民のうち、沈没するまでの間に約二〇〇万人を救出して本州へ移送できたが、残りの一八〇〇万人の救出が間に合わなかった。一八〇〇万人の住民は首都圏島と運命を共にすることになった。

沈没につづいて発生した巨大津波によって、日本各地でさらに二〇〇万人が犠牲になった。

二〇〇万人の犠牲者のうち、五〇万人が首都圏島から救出されて本州へ移送された人びとだった。本州の新海岸に設置された救出者用の一時収容施設や上陸時の一時休憩用のテントなどに滞在していたときに、不運にも巨大津波に襲われたのだった。

残りの一五〇万人にのぼる犠牲者は日本列島の太平洋岸各地を襲った巨大津波の犠牲者だった。大阪、神戸を中心とする近畿圏と名古屋を中心とする中京圏に犠牲者が集中した。なかでも名古屋の犠牲者が群を抜いて多かった。

津波警報が間に合わず、二〇数メートルの第一波が伊勢湾を襲い、それにつづいて第一波を超す巨大な第二波が相次ぎ、伊勢湾を襲ったのだ。第一波は伊勢湾の西岸に連なる都市を直接襲ったが、その引き潮が第二波の直進を遮り、巨大津波を名古屋都心へ向わせたのだった。

中京圏を襲った巨大津波で、一瞬うちに、伊勢湾西岸の都市群と名古屋全市が水を被った。犠牲者の多くは就寝中の市民で、溺死だった。

その数十分後に、巨大津波が近畿圏を襲い、大阪、神戸をのみ込んだ。四国の東海岸伝いに紀伊水道に入った津波は淡路島に阻まれ、反転して大阪湾奥へ入っていき、増幅して一〇数メートルの巨大津波となり、大阪と神戸を襲ったのだ。

警報で市民の多くは避難していたが、間に合わず、犠牲となったひとも多かった。

犠牲者数は首都圏島とともに海中へ没した一八〇〇万人を含め、日本全体で二〇〇〇万人におよんだ。日本列島の太平洋岸を襲った巨大津波によって家を奪われたり、住まいを追われた被災者も二〇〇〇万人を超える膨大な数に上った。

被災者の多くは住むところを失い、食べものや飲み水にも事欠く有様だった。

彼らはやがて被災都市から追い出され、仕事を探し、住み処を求めて全国を彷徨うことになるのだ。

ひとつの災害で未曾有の犠牲者が出たのは、首都圏島沈没が超過度集中集積超巨大都市の沈没なるがゆえの出来事だった。超過度に集中集積した超巨大都市は経済効率性もさることながら、災害に対しても効率よく反応し、犠牲者や経済的損失などの被害をも膨大なものにするのだ。

東京沈下がはじまって以来、世界第二の経済力を誇った日本経済も年々下降線を辿っていたが、首都圏島の沈没とそれにともない生じた巨大津波で、日本経済は決定的なダメージを受けてしまった。

本州から関東平野がもぎ取られることさえ、想定外だった。たとえ首都圏の島化を予測できたとしても、ほどなく生起した首都圏島沈没と巨大津波の発生は全く計算外だった。

東京がダメなら、大阪や名古屋があると言い、東京沈下以来、バカ張切り状態だった両大都市が巨大津波で致命傷を受けてしまった。太平洋ベルト地帯に集中していた工場群や原子力・火力発電所もほぼ壊滅した。また太平洋岸側を走っていた高速自動車道や主要国道、新幹線などの鉄道もいたるところが寸断され、交通機関に甚大な被害がおよんだ。関西空港、中部空港も海中へ没してしまった。

日本列島は経済のみならず、社会も半身不随に陥った。日本経済は生産力の七〇パーセントを失い、東京、大阪、名古屋の三大都市のうち、東京は周りの都市群とともに日本海溝へ姿を消し、残りの二大都市も巨大津波で壊滅的な被害を被り、都市機能をほぼ完全に奪われたのだ。

日本の国内総生産（ＧＤＰ）は前年に比べて約八〇パーセント減少することになるだろうと予測された。

それでも巨大津波だけなら、日本経済はまだ起死回生の手は打つことができたかもしれない。だがさらに決定的な追い打ちが待っていたのだ。

## ３７

「マルさんのお陰だ。あのまま流されていたら、どうなったか分からない。いまごろはサメに食われていたかもしれない」

佐藤は病院を退院したて本社に戻ると、円山を訪ねたのだ。

「あのままでも、無事、筏はハワイか、北米大陸の西海岸に流れ着いていたんじゃないかな」

ニコニコ顔の円山を前にしても、佐藤は自分が生きてここにいることをどうしても信じることができなかった。円山と若い写真部員に命を救われたのだと何度も自分に言い聞かせても、首都圏島とともに海中へ沈んでいった自分が生きていることが不思議でならなかった。

あの夜、物凄い轟音を聞いたまでは覚えている。裏山が山崩れを起したと思っていたが、あのとき、首都圏島全体が地滑りを起こし、海溝へ向った滑り落ちていったのかもしれない。急に、身体が浮いたような無重力状態に陥ったような気がした途端、意識が遠のいていったのだった。

あれからどうなったのか分からない。多分、海中で着ていたライフジャケットが膨らんで、海面に浮いていたのだろう。たまたま遭遇した筏に救われたらしい。

筏には年寄りや年配者ばかりで、若い男はひとりもいなかった。

首都圏島がスルスルと海になかへ沈んでいくとき、筏造りをしていた年寄りたちは筏とともに海へ放り出されたという。たまたま流れてきた筏に掴まり、筏に乗ったものの、高波に翻弄されて何度も海に振り落とされたが、最後まで筏にしがみついていた三人が残った。筏とともに流されていく途中で出会った生存者たちを救い上げて、救助されたときには一四人になっていたのだ。

そのなかに、斉木の姿も白頭大人の姿もなかった。筏造りをしていたという年寄りたちにきいてもふたりのことは覚えていなかった。東京沈下以来、青梅や奥多摩の林業家の間では、山崩れで倒れた杉や桧で筏造りをしていたひとが結構いたらしい。

彼は社に戻っても、落ち着かなかった。かといって、動く気もしなかった。机で椅子の背に身体をもたせ、ぼっうとしていた。

眠りに落ちようとしたとき、机の電話のベルがけたたましく鳴った。

彼は吃驚して飛び上がり、受話器に手を伸ばす。指先が受話器に触れようとした途端、ベルが止んだ。彼は手を引っ込め、椅子に座り直すと、ふたたび目を閉じた。

また、ベルが鳴った。彼は二度目のベルが鳴るのを待って、ゆっくり手を伸ばす。

「佐藤くん……」

九鬼の声だった。

「ええ……」

「ホントに佐藤くんだね。よかった、無事で……」

「自分自身信じられないんだけど……」

彼は命拾いした顛末を話した。

「へぇー、そんなことがあったの」

九鬼はしばらく言葉を発することがなかった。

「……」

彼は自分が生きていることを確かめるように、受話器を通して聞こえてくる九鬼の息遣いに耳をそばだてる。

「首都圏島と一緒に大勢のひとが亡くなった。だが……、こう言ってはなんだけど、五年もの猶予期間があったのに、それでも首都圏島に残っていた二〇〇〇万人はどこへも行く当てがなくて首都圏島に残らざるを得なかった人びとだったことだ」

「なんだって……」

彼は怒気鋭く叫ぶ。

「いや、誤解しないでくれ。行政や政治の怠慢を憤っているのだ。日本の行政や政治は関東平野首都圏が本州から切り離されて首都圏島となり、沈没することが明らかになって、慌てて救出活動をはじめたのだ。そして首都圏島に残っている二〇〇〇万人の住民を取りあえず本州へ移送することにしたのだろう」

「そうするのが当然だろ。ほかにどうしろというんだ」

「問題は、首都圏島から救出したとして、本州へ移送してきた二〇〇〇万人の先々のことをどう考えていたのかということだよ。いや、それはまた……」

「まず、沈没する首都圏島から救出することが先だ。首都圏島に残っていた二〇〇〇万人の住民も仮桟橋へ我先に集まってきたんだ」

「住民の行動は切羽詰まってのものだろう。それは当然のことだ。問題はこの国の政府や政治だ」

九鬼は二〇〇〇万人を救出するなら、彼らの将来までも考えて行動すべきだという。取りあえず、本州へ移送すればいいではすまないのだ。テント村にでも収容すればいいとしか考えていなかったのではないか。これでは二〇〇〇万人の難民を新たにつくり出すようなものだ。

行く当てもない二〇〇〇万人が全国を彷徨し出したらどうなるんだ。二〇〇〇万人のホームレスが日本中を徘徊することになるのだ。

五年もの間、無策のまま、住民が自主的に地方へ移住するのを促すだけで、積極的な施策をせずにきた。こうやって、結果的に、どこかへ移住したくともできない年寄りや貧困層を放置してきたのだ。そのつけが首都圏島とともに海中へ没していった一八〇〇万人の犠牲者を生んだ原因じゃないのか。救出して本州へ移送された二〇〇万人のうち五〇万人が巨大津波で犠牲になったが、このままでは残っている一五〇万人は難民化するほかないだろう。

この国の地球温暖化に対する考えは根本的に間違っている。地球温暖化という地球環境問題は二酸化炭素などの温室効果ガスが地球環境容量をオーバーして大気中に蓄積したために生じたものだ。地球環境容量は地球環境の全構成要素の相互間のバランスすなわち地球全体システムのもとで決まるものである。物質、エネルギー、情報といったものが増えたり、あるいは減ったりすればバランスが崩れ、地球全体システムは変調をきたす。

地球全体システムが変調すれば、様々な現象が生起する。気候変動然り。今回の首都圏島沈没もそうだ。

地球上では、人間は地球環境容量をオーバーしないように行動しなければならない。すでに地球環境容量をオーバーしてるならば、それを増長する行動は厳に謹むべきであるのだ。

しかるに、この国ではいまだにこれに逆行する行動をとっている。ことに経済活動において甚だしい。経済成長を目指し、自国の農業を犠牲にしてまで外需に依存する輸出産業振興に血道を上げてきた。そのために、大量の石油や石炭などのエネルギー資源や各種の鉱物資源を世界中から買い漁って工業生産に励んでいる。これは他所の国の地球環境容量を横取りするものにほかならない。

このような行動はいずれ行き詰まる。いや、すでに、多くのところで行き詰まりを見せているのだ。

「首都圏島沈没もそのひとつの現れにすぎないというのですか……」

彼は斉木を思い浮かべた。白頭大人に会って、斉木が急に大人のもとに留まると言いだしたのか、分かるような気がした。

「その通り」

「それじゃ、これからもいろいろなことが起き、われわれ人間に襲いかかるということですか……」

「もちろん、地球温暖化もまだまだ収まりそうにない」

「環境難民は地球環境容量オーバーの産物ということになるんですかね」

「そう言えなくもないだろう。地球全体からみればそうでなくとも、ある区域の環境容量からはみ出した結果として難民化するわけだから。いや、現在の世界人口はすでに地球環境容量をオーバーしているかもしれない」

「じゃ、今回、はからずも首都圏島から救出されて本州へ移送されてきたひとたちも同様に環境難民化する運命あるということか……」

「そうだ。本州へ移送しただけなら、彼らは環境難民となるほかない。だから、環境難民化させない施策が必要なのだ」

「環境難民化させない施策か……」

佐藤は囲炉裏端でイワナを食いながら、新しい生き方について話していた白頭大人を思い浮かべた。大人先生のいう新しい農園構想の実践は喪失した地球環境容量を取り戻そうとする行動だったというのか。

だがすでに環境難民化しかけている何百万人何千万人をどうやって地球環境容量を取り戻す行動に駆り立てようというのか。果たして、そんなことが可能か。

「そうだよ。これができなければ日本の将来はないし、人類の未来もない」

「……」

「そうそう、忘れていた。電話したのは、北極海の氷は全滅したこと、グリーンランド氷床の大崩落が間近に迫っていることを知らせたかったからだった」

九鬼はこう告げると、電話を切ってしまった。

彼は九鬼が電話を切ったことに気付かず、しばらく受話器を耳につけた

まま、ぼうっとして九鬼がふたたび話し出すのを待っていた。

## 38

首都圏島の沈没、そして巨大津波とつづき、日本列島全体が震撼とするなか、首都圏島避難民や巨大津波避難民のなかに不安と不満がくすぶり出し、一部に新たな救いを求めて蠢動が生じていた。

大災害がふたつづいたにもかかわらず、行政にも政治にも積極的な動きはなんら見られなかった。国際社会の動きも鈍かった。世界的な経済危機や世界各地を襲う熱波や日照りなどの気候異変に翻弄されて食糧不足に怯え、さらにまた巨大津波に見舞われた各国はひたすら自国の対応に追われていたのだ。

世界の食糧供給地帯である北米大陸とオーストラリアでは干害が何年もつづき、穀物の生産量が激減していた。また東南アジアの米作地帯には毎年のように巨大サイクロンが襲い、被害が広がっていたのだ。

政府や地方自治体は何百万何千万におよぶ遺体の処理に追われ、避難民に対する救済策や復旧事業に手が回らないのだ。巨大津波の後片づけはおろか、破壊された港湾施設や堤防の補修など、ありきたりの復旧事業さえなかなか進まなかった。

ふたつの巨大災害のあとだけに、つづいてなにが起こるか分からず、誰もが不安に駆られ、腰を落ち着けて仕事をしようとするものがいなかったのだ。

首都圏島から救出されて移送されてきた避難民たちには新設団地のマンションや仮設住宅が用意されたいたが、これらの住宅は一時的な滞在用として用意したものにすぎなかった。それにだけに数が少なく、避難民に十分行き渡らなかった。溢れた残りの避難民は急造のテント村に収容されたが、これらはもちろん、安住の居場所とはならなかった。

行政サイドではこれらの避難民たちが行き先のない人びとであるのを知っていたにもかかわらず、いずれ地方へ移住していくものと期待して、いつまでたっても十分な定住の場所を用意しようとしなかった。

これに対して、巨大津波の被災避難民はさらに悲惨であった。国は対応を都府県や市町村に任せたため、行政サイドの対応は各地まちまちだった。突然の津波に住まいや財産を奪われ、肉親を失ったにもかかわらず、一時的な避難場所すら用意されないところもあった。仕事はもちろんなく、その日から日々の糧にも窮する有様だった。

首都圏島から移送されてきた避難民が一五〇万人、巨大津波の被災避難民が約二〇〇〇万人で、これらを合わせると、避難民の数は二一五〇万人にもなる。この膨大な数の被災難民が難民化するのは時間の問題に過ぎなかった。

首都圏島が沈没して以来、求心力を失った中央政府や政治は積極的に動くことはなかった。国際社会からの食糧の提供や避難民受け入れの申し出もなく、行政は寝る場所と僅かな食べものを用意するだけで精一杯だったのだ。

かといって、巨大津波の不意打ちを食った県や市町村レベルの地方自治体には国に代わって対応策を講じる力は全くなかったのだ。突然襲ってきた広範にわたる大災害にどうしていいのか分からず、対応が後手後手に回った。大体、十分なカネもなければ、ヒト、モノにも事欠く地方自治体には

散乱している遺体の収容に追われ、それ以上のことは土台無理だった。
それに殆ど周辺の全市が被害を受けたところもあり、動きたくとも動けない有様だった。
食べものや飲み水も配られず、放置されたままにされた巨大津波避難民の多くに不満が募り、爆発寸前にあった。肉親を失い、家を奪われ、悲しみに暮れていたものの、我慢の限界はとっくに超えてしまっていた。彼らはもはや自ら動くほかなかった。
彼らは飢えに襲われ、不安に駆られ、集団をつくり、住み処を求め、仕事を探し、食べものを得ようと彷徨い出す。
「あのコンビニに行ってみよう。なにか食べるものがあるかもしれない」
食べ盛りの少年の一人が仲間を誘う。
あの夜、少年は街をひとりでうろついているとき巨大津波に遭い、高層ビルの屋上へ逃げ込んで命拾いした。津波のあとのビルは窓ガラスが壊れ、三階まで大量の土砂が流れ込んでいた。
家は跡形もなく流され、コンクリートの土台が剥き出しになっていた。父親と母親は家もろとも流されたらしく、いつまで待っても姿を見せなかった。二人は行方不明者として処理されたのだった。
倒壊を免れた高層ビルの多くは放置されたままだった。少年は放置されたままのビルに潜り込み、空き部屋を探して寝場所にした。
少年は空腹を抱え、食べものを求めて街を彷徨う。巨大津波は都市の中心部をひと呑みし、いたるところにゴミや土砂を山のように残していった。流されずに残ったコンビニやスーパーなどの建物の周囲には家や船舶の残骸が積もり、流されてきた何台もの車が土砂や石に埋まり、入口を塞いでいた。
少年たちは土砂を除け、入り口を探す。行く手を塞ぐように丸太が横たわっていた。彼らは隙間から身を潜らせる。
ガラスのドアは壊れ、店内にも土砂が流れ込んでいた。
「うぇー」
腐敗臭が漂っていた。
陳列棚は倒れ、ペットボトルやパックされたおにぎりや弁当が散乱している。割れたガラスに土砂が積もっていた。袋詰めのスナック類があたりに飛び散っている。
少年たちはスナック類を拾い集め、ペットボトルを抱えて、外に出る。外では別の少年グループが待ち構えていた。
小競り合いや争いはいたるところで毎日繰り返された。
食べものや飲み水をめぐる争いは、次第に激しくなっていった。

## 39

「佐藤か……」
受話器から斉木の声が洩れてきた。
「無事だったのか。どこにいるんだ……」
佐藤は信じられなかった。彼は自分が筏に救われたことで、斉木も海上のどこかで救助を待っているにちがいないと思い、毎日、海上捜索の様子を見守っていた。写真撮影にでるヘリコプターに便乗して自ら海上捜索に加わることもあった。社にいるときは机で斉木からの連絡を心待ちしていた。だが一日そして一日と過ぎるうちに、次第に絶望感が頭をもたげ出し

ていた。
「よく分からないが、どうやら紀伊半島のどこかに打ち上げられているらしい。志摩半島の近くかもしれない……」
「辺りに目印になるものはないか」
「……」
「じゃ、志摩半島の海岸から尾鷲辺りを探してみよう。ヘリの音を聞いたら、電話くれ。たき火はできないか」
電池が切れたのか、電波事情が悪いのか、受話器からもう斉木の声はしなかった。

首都圏島が沈みはじめたとき、砂浜で組み立てられた筏は押し寄せた海水に浮かび、海上へ流されていった。流されたというより、筏は滑り出した首都圏島に置き去りにされたようだった。
月明かりのなか、首都圏島は少しづつ海中へ姿を消しながら、するすると離れていった。筏が吸い込まれられないように、必死で水をかいた。首都圏島が見えなくなってから、しばらくして急に海が引込み、筏が転覆した。海に落ちたひとを助け、全員が筏に身体を結びつけたとき、大きな高波が押し寄せた。巨大津波だった。
筏は巨大な高波に翻弄され、激しく揺れ動いた。気が付いたときには山腹に打ち上げられていたという。
筏は雑木林のなかで見付かった。まるで、木の枝に括りつけられたような形で大きな木の上に乗っていた。巨大津波が筏を引き連れ、木々をなぎ倒して山腹を駆け登ったとき、途中で筏を置いてきぼりにしたのだろうか。
筏の乗員も半数に減って五人しかいなかった。斉木が一番若く、残りは白頭大人ほか三人の年寄りだった。

## 40

急に暑くなった。雨は降らず、連日、三五度を超した。
巨大津波の爪痕が残る現代文明都市は半身不随の見るも無残な姿をさらけ出したまま、真夏の強烈な太陽に射竦められ、土砂に埋もれていた。
ビルの破れた窓ガラスには流木やゴミが絡みつき、大きな石や根刮ぎになった大木がエントランスに塞いでいた。土砂に埋もれたビルには夜になったも灯が点ることもなく、超高層ビルは墓標のように暗い夜空に聳えていた。
大阪も名古屋も巨大津波の後片づけが進まず、いたるところに流木、家や船の残骸や土砂がうずたかく積もったままだった。上水道や下水道の復旧もまだだった。
近隣の市町村から救援の手が差し伸べられたものの、肝心の被災市町村側の行政機能がほぼ壊滅状態で、受け入れ態勢を整えるのに時間がかかっていたのだ。
復旧作業がはじまってもなかなか進まなかった。
被災範囲が広範におよんだこと、津波が運んだ土砂の量が膨大だったこと、そのうえ、倒壊した家屋が多く、また高層低層を問わず、ビル建物も損傷が酷く、解体するまで放置するほかなかったからだ。水に浸かり、大量の土砂に埋もれた壊れた家や建物を誰も清掃しようとしないし、後片づけもしようとしない。水道は断水したままだし、所有者の家族に犠牲者が

多く、後片づけをしようにもできなかったのだ。

それにいまだに道路や鉄道が分断されたままだし、空港や港湾施設も壊滅状態だったのだ。重機や復旧用資材はおろか、食糧や飲用水を運び込むことすら十分にできなかった。時折、ヘリコプターは飛来し、食糧や医療品が投下されたが、食糧は極度に不足していた。

略奪やこそ泥が横行した。避難場所もなく、食糧の給付もなく、家族と離ればなれになった子供たちは、野宿や高層ビルの空き室をねぐらにしてスーパーやコンビニを襲い、食べものや飲み物を漁るほかなかった。彼らには毎日が生き地獄だった。

現代文明大都市では毎日大量のヒト、モノ、サービス、情報が行き交う。ひとつでも途絶えると、都市機能は半身不随に陥いってしまうのだ。巨大津波でもろもろのインフラが破壊され、ライフラインを奪われ、道路や港湾施設が破壊されて物流が途絶えてしまっては、住民はもはや生き永らえることはできないのだ。

大都市が全面的に壊滅するような被害を被るということは、戦争以外に、これまで経験がなかった。大量難民発生の場所と化した現代文明都市で、彼らはもはや生きていくことはできなかった。

## 41

巨大津波に襲われたとき、太平洋岸の各地で火災が発生した。工場地帯が連なる太平洋ベルト地帯で被害がもっとも酷かった。

火力発電所では冷却水路が砂で埋まり、ボイラーが爆発した。燃料タンクに引火し、黒煙を上げた。製油所の反応塔や配管が破損し、ガス漏れを起し、火災を起した。石油備蓄タンクが揺すられ、火花を発し、炎上した。化学工場が津波の一撃を受け、配管がずたずたに切断し、爆発を繰り返した。

原子力発電所では冷却水として大量の海水を取水しているが、巨大津波の最初の引き潮で一時的に海水を取水できなくなって緊急停止した。つづいて大量の砂が取水路と排水路を埋めた。津波の衝撃で配管が破断し、放射性ガスや放射性物質が噴出した。

巨大津波は海岸を直撃し、港湾施設に壊滅的な打撃を与えた。コンテナーヤードには船積みをまっていたコンテナーが山積みされていたが、すべてが流出してしまった。輸入して搬出を待っていたコンテナーも同様だった。

海上に作られた人工空港や埋立造成地に建設された空港でも巨大津波の第一撃で航空機やターミナルビルが完璧なまでに破壊されてしまった。臨海部や海岸沿いを走る道路、河川橋梁や島へ渡る橋梁も分断の憂き目にあった。

巨大津波は近隣住民に火災の恐怖を与えたり、大気汚染や放射能汚染の危険をおよぼしたり、交通手段を奪ったばかりではなかった。

道路の破損や港湾施設の破壊によって、輸入や物流が途絶え、食糧不足をもたらし、日常品を奪っていったのだった。

それでも巨大津波の被災民や被害地近隣住民の多くは、いつかは元通りに復旧すると信じていた。だがいつまで待ってもなかなかやって来なかった。

## 42

「先生はどう……」

佐藤は救出直後から病院で治療をつづけている白頭大人のことが気になっていた。斉木からなんの連絡もないのにしびれを切らし、電話したのだった。

「大分、よくなっている。もうすぐ退院できるだろう」

「そうか。で、おまえさんどうしたんだ、そんなとこにいていいのか、本省の課長たるものが……」

救出されたとき、白頭大人はかなり衰弱していた。斉木は役所にも顔を出さず、白頭大人にずっと付きっ切りだった。

「一年間、休職することにしてある」

「奥さんは……、いいのか……」

「単身赴任していると思っていてくれと言ってある」

斉木は白頭大人の農園思想にすっかり被れてしまったのか、あれからどうもおかしかった。

「それで……」

「どうすればいいか考えている」

「なにを……」

彼は「いつも官僚は前例に従って行動すればいいんだと言っていたではないのか」と言ってやりたいのをじっと我慢した。

「近いうち、行動を起こすことになるかも……」

「白頭大人先生と農園をはじめるつもりか」

「どうすればいいか……」

斉木は妙なことを言い出した。

ソ連の崩壊後、米国は一人勝ちしたと思い、新自由主義を振り回し、さらなる発展を求めてグローバリゼーションを極めたにもかかわらず、原料高騰、食糧不足、金融危機、そして世界大不況を招ねいてしまった。誰れも気付かないうちに、隆盛を極めた資本主義経済がいよいよ衰退へ向って新しいステージに入っていたのだ。

日本は世界の工場から技術革新を通して世界第二の経済大国にのし上がったものの、それはあくまで外需依存の輸出至上主義経済国家にすぎなかった。世界不況のなかで、外需が低迷し、輸出依存の巨大な生産力（設備）はわが国の経済や大企業の首を絞めることになっていった。

途上国の追い上げを受けるなかで、日本経済が成長をつづけるにはさらなる大量生産大量消費大量廃棄による世界市場拡大に活路を求めるほかない有様だ。だがこのようなことは有限な地球にとって土台ムリなことだし、また資源もエネルギーもなく、技術開発力にも陰りが見える日本の戦略としても疑問がある。

「全く、その通りだ。それにもかかわらず、日本の政治家や権力を握る官僚たちはどうだったか。このことを全然省みようとしなかったではないか」

「うん、忸怩たるものがある。だから、よく考えてみることにしたのだ」

斉木はこう言うと、一方的に電話を切ってしまった。

## 43

巨大津波の被災者のなかに徒党を組んで荒らし回る動きが広がった。多

くはゼロメートル地帯で家や家族を失った若者たちだった。なかには両親を失い、孤児となったものもいた。

津波に襲われたゼロメートル地帯では流れ込む河川の堤防や防潮堤が決壊したままだった。堤防や防潮堤の補修が計画されたが、工事請負業者が見積書を作成するために調べたところ、妙なことに、海面の水位が以前よりかなり上がっていたのだ。そのため、費用はおろか、必要な資材も倍加すること分かり、補修が当分見送られることになったという。

ゼロメートル地帯が水浸しのまま放置されるという噂が立った。

噂を真に受けた被災者たちは怒ったが、どう行動していいのか分からなかった。というのは、ゼロメートル地帯では犠牲者も多かったし、巨大津波に洗われたゼロメートル地帯では土砂が大量に流されて地形がすっかり変わってしまっていたからだ。

それに働き口もなくなった。海岸や埋立地の工場や商店も流失してしまったのだ。岸壁などの港湾施設が破壊し、漁船や釣り船も陸へ打ち上げられたり、岸壁に打ち付けられて破損して使いものにならなくなった。工場や商店での仕事も、港湾関係や漁業関係の仕事もなくなった。

彼らには食べるものも飲み水も十分なかった。幼児や家族を抱え、いつまでも水浸しの土地にへばりついているわけにはいかなかった。

空腹に耐えかねた子供たちは近隣の市町村へ出掛けて食べものを乞うしたり、畑や果樹園を荒らし回った。大人たちも家族を引き連れ、近隣の市町村へ移り住む。

最初は大目に見ていた土地の人たちも、子供たちに大人も加わり次第にエスカレートしていく行動に警戒心を募らせ、自衛するようになった。

小競り合いや争いが流血の事件に発展するようになって、対立からよそ者排除へと進んでいった。

だが近隣市町村への被災者たちの大量流入がつづいた。海岸に面した大都市や周辺都市のほぼ全域が被災し、港湾施設は壊滅し、高速自動車道も分断されていて復旧に手間取り、被災住民たちにはいつになったら元の生活に戻れるか、全く予想がつかなかったからだった。それよりも被災住民たちに移住を促したことは日々の食料や飲み水が全く不足していたことだった。

大都市の胃袋を支えていた海陸からの大物流がほぼ完全に途絶え、ほそぼそ入ってくるものは近隣から僅かな野菜や果実などの生鮮食料ばかりだった。値はつり上がり、日を重ねるごとに被災地の食料事情は悪化の一途を辿っていった。日々の食料を得ることのできない被災者たちは食べものを求めて近隣を彷徨い動き回るほかないのだ。

被災者たちの大量流入で近隣市町村は悲鳴を上げた。もはや限度を超えていた。それでも止まなかった。

それはまるで津波のような人口大移動だった。そして人口津波は近隣の都市や街を襲い、農村や漁村を何度も襲い、呑み込んでいったのだ。

超過密大都市が大災害によって壊滅的被害を被れば、被災者の大群が人口津波となって近隣を襲うのだ。被災者の大量流入によって近隣市町村はしゃぶり尽くされ、新旧住民は争いの渦のなかへ陥ることになった。

## 44

巨大津波によって発生した太平洋側の人口津波は、内陸部の近隣市町村

から日本海側へと波及していった。
裏日本と呼ばれ、太平洋岸に比べ、長い間日の当らなかった日本海岸に混乱と異様な活気が支配した。人口津波の影響を真面に受け、多くの県や市町村は混乱を極めた。
だが国は日本海側の港湾に出入りする外国船や海岸に近づく不審船を監視するだけで、人口津波に対してはなんら動こうとしなかった。
世界は地球温暖化の真っ只中にあって、気候大変動下にあった。世界の各都市には熱波が襲い、酷暑をもたらした。穀倉地帯や森林地帯では何年にも渡って日照りや小雨がつづき、干害や森林火災を発生させた。また、日頃雨が少ない地域に、突然、大雨や長雨が襲い、洪水を引き起した。
都市住民の健康や社会生活は大打撃を受け、多くの犠牲者が出た。一方、このような気候異変は世界の農業生産に大きな影響をおよぼし、世界の穀物供給は逼迫し、価格が急騰していった。
世界は以前から慢性的な食糧不足の状況にあった。
食糧の大半を輸入に頼ってきた日本は、止むを得ず、絶対量が不足するなかで、金に任せて世界中から食料を漁ってきた。だが東京沈下以後次第に外貨が逼迫するようになって、思うように食料を入手できずにいた。
それに加え、太平洋岸の港湾施設が津波で破壊され、船舶が接岸できなくなった。漸く手に入れた食料も太平洋岸から陸揚げできず、時間と金をかけ、わざわざ日本海側まで回らなければならなかったのだ。これによってエネルギー消費量が増え、二酸化炭素の排出量も増えることになった。
経済大国日本も食糧不足に悩まされる事態に見舞われることになった。輸出不振による不況と外貨不足がこれにさらに拍車をかけた。
近隣のアジア周辺諸国も同様だった。人口圧力が増すなかで食料生産が追いつかないのだ。いや、サイクロンや日照りによる干害、長雨の日照不足、高潮や海面上昇による農地減少などによって、年々食料の生産量が減少傾向にあったのだ。
いたるところで飢えや水不足が顕現化して、多くの難民が食べものを求めて彷徨う出した。こうした難民が小さな舟に乗って、隣国や日本へ密入国を企てる。
東京沈下が世界に知れ渡って以来、日本は沿岸警備を強化していた。首都圏島沈没後、日本はさらに神経質になっていた。混乱に乗じた侵略や密入国を恐れたのだった。
食糧不足と外貨不足に追われるのなかで、国は外国からの侵略に備えることで精一杯だった。到底、巨大津波被害対策や復興事業には手が回らなかった。国にはこれらのことを都府県や市町村に委ねるほかなかったのだ。
こんななかで、これまでじっとしていた各地の巨大津波の被災者たちが動き出したのだった。何万何十万何百万何千万という被災者が難民となって、近隣市町村から内陸部へ、さらに日本海側へと、食料や仕事を求めて動き出した。
大量難民の列島横断的大移動がはじまったのだ。
都府県や市町村が悲鳴を上げ、国に泣き付いた。だが国にはなにもできなかった。いや、なにもしようとしなかったのだ。動きを抑えてみても、けた外れの数に昇る難民を収容する場所を確保することも難しかったし、食べものや飲み水を手配することも難しかったのだ。
大量難民に対して国も地方自治体もどう対応していいのか分からず、いたずらに強権を振るい取り締まりを強化しても数が多く、逮捕して収監しようにもできなかった。国にも地方自治体にも全く対策が見当たらなかっ

たのだ。
首都圏島から救出されてきた避難民にも同じような動きが現れていた。

## 45

「人間が人間であることをいつから忘れてしまったのか」
細い腕に顎を載せ、リビングのテーブルでじっと考え込んでいた白頭大人が呟くように言う。白頭大人は病院から退院して以来、斉木の小さなマンションで毎日を過していた。
「はー……」
コーヒーをいれていた斉木が振り返る。彼には白頭大人がなにを言っているのか、理解できなかった。
「仲間たちを訪ね回りたいと思っているのだが……」
「はあ……」
斉木は白頭大人のまえにコーヒー碗を差し出す。向かい合ってテーブルに着き、真正面から白頭大人をまじまじと見た。
ふっくらとした感じの顔から肉が削げ落ち、皺が深く目立つようになっている。身体全体が以前より一回り細く小さくなった。
「収容所が酷いようだが……」
目が虚空を見つめ、なにかを探っている。
「……」
斉木は口を開こうとしたが、声にならなかった。
収容所とは首都圏島避難民の収容所のことか。斉木はテレビで放映していた画面を思い起こす。画面一杯に映し出された収容所の避難者たちの無数の虚ろな目の大写しにつづいて、テント張りの片隅で所在なげに辺りを見回しているお年寄りとそばに横たわる老女が大写しになった。老女は床に直に横になり、眠っていた。それはまるで時間が止まったような世界だった。
彼らはなにを待っているのだろうか。待っているものがいつか現れると思っているのだろうか。待っているものが現れるか、それとも永久に現れないのか、彼らにはもうどうでもよかった。彼らはひたすら待つほかなかった。首都圏島とともにすべてを失った人びとにはただ時間が過ぎていきさえすればよかったのだ。
「こんなことがあっていいのか……」
白頭大人の腹の底から搾りだすような低い声が響く。
斉木は突然頭を殴られたような衝撃を感じた。首都圏島から救出するということは収容所のテントに収容すればいいというものではないのだ。それだけなら、首都圏島とともに海溝へ沈んでいったほうがましではないか。
首都圏島から救出すれば、あとは自分たちで考えろというのか。それとも救出されれば、あとは当然自分で考えると思っていたのか。
二〇〇万人が救出されたと聞いたとき、斉木はほっとした。残念ながら、残りの一八〇〇万人を救えなかったとしても、何人かを救えたことに彼自身救われた思いがしていたのだ。そのときは首都圏島で避難民救済の指揮をとった田中をうらやましくさえ感じたのだった。
だがあれは官僚たちの自己満足の行為に過ぎなかった。というより、社会的非難をかわすために仕組んだゼスチャーに過ぎなかったのではなかったのか。

あのとき「戒厳令」なみの警戒宣言（大規模地震対策特別措置法）を発すべきだと駆けつけてきたのは田中ではなく、新聞記者の佐藤だった。佐藤はそれだけのために本州からヘリコプターで首都圏島に飛んできたのだ。

あのときの会議室の様子が斉木の脳裏に鮮明に浮かんだ。そのとき、ひとつの疑惑が空一面が広がる嵐の黒い雲のように頭一杯に広がった。

「ああ……」

斉木は茫然として、白頭大人を眺めていた。目が合うと、反射的に外してしまう。いや、目を合わせることができなかった。

斉木は自分が分からなかった。

首都圏島沈没の危険があるにもかかわらず、なぜ、白頭大人と行動をともにしてきたのか、それは一体なんのためだったのか。無意識のうちに、自分の行いの非を悟り、罪滅ぼしのためだったのではないのか。それとも、危険を感知し、保身のためのとっさの危機管理的行動だったのか。それにしても、一年間も休職しようと考えたのはなぜか。命拾いしたお駄賃の休養に過ぎないのか。九死に一生を得て、人生観が全く変わったとでも言うのだろうか。

斉木は東京沈下に対する組織や権力のトップの考えをうすうす感じていたのだ。官僚組織のなかでのらりくらりと長年暮らしていると、その色に染まってしまい、色の違いが分からなくなってしまう。官僚組織で生きていく術が体にしみ込み、いつのまにか一端の官僚となっていたのだ。

「このままでは、折角救出した避難民を見殺しにすることになるが……」

「はあ……」

顔を上げると、白頭大人のじっと見つめる鋭く光る目があった。その目は「一八〇〇万人を見殺しにしたというのに、また繰り返そうとするのか」と言っているように見えた。

「とにかく、明日からでも、仲間たちを訪ね回ることにする。避難してきたひとのなかに農園生活を希望するひとがおれば斡旋したい……」

白頭大人は言いながら、斉木に「きみはどうする」という目をした。

白頭大人には全国各地に一五〇人ほどの仲間がいる。仮に、一〇人ずつ引き受けてもらえば、一五〇〇人だ。一〇〇人ずつなら一五〇〇〇人になる。一五〇〇〇人がそれぞれ一〇〇人規模の農園をはじめれば、一五〇〇〇〇人、一五〇万人となる。首都圏島から救出された避難民と同数になる勘定だというのだ。

「その勘定は楽観的すぎると思いますが……」

「そんなことは言っておれないだろう」

白頭大人は斉木の逡巡を一蹴する。

白頭大人が開いていた農園はいわば自給自足型農園だった。食料の自給自足がらエネルギーの自給自足まで生活必需品を自給自足しようとするものだった。これは容易なことではない。だが白頭大人が言うように、これを実現できなければ、首都圏島難民には飢えが待っており、生きていけないのだ。

首都圏島難民だけでない。巨大津波難民にも同じ運命が待っているのだ。一八〇〇万人を見殺しにしたうえ、首都圏島難民や巨大津波難民をも巻き込むことは許されることか。なんとかして、この急場を凌ぎ、つぎのステージへつなげよう。

斉木は腹を括るほかなかった。

## 46

「頼みたいことがある。白頭大人が仲間と連絡を取りたがっているが……」
受話器の奥から口の中にこもるような声が響く。斉木だった。
「仲間と……」
佐藤は怪訝な声を発した。
「連絡先のメモをなくしたのだ」
斉木は不機嫌な声で、白頭大人先生がテント村の避難民を救済しなければと考えているんだと口早に言う。
首都圏島から救出されて本州に移送されてきた避難民二〇〇万人のうち、巨大津波を逃れた一五〇万人の殆どが急造のテント村に収容されたままだ。これらのテント村はもちろん、一時的な滞在用として用意したものにすぎなかった。
別に、避難民用の恒久的住宅として、新首都近郊に住宅団地が新設され、マンションや戸建て住宅が建設されていたが、数が少なく、十分ではない。
国は当初から避難民全員を新設団地に収容しようとは考えていなかった。当然、避難民たちはいずれ地方へ移住していくと踏んでいたのだ。そうでなければ、避難民の数をごく低く想定していたことになる。
避難民の多くはどこへも行く当てがなく、テント村暮らしをつづけるほかないのだ。もしどこかに安住の地を見付けることができれば、いつまでも首都圏島にへばりついていずにとっくの昔移住していたはずだ。
彼らには住まいだけが問題ではなかった。テント村では食べものも不足しており、毎日の生活が不自由だ。風呂にはなかなか入れず、トイレが足りず、不衛生極まりないではないか。
避難民は感染症の危険もさることながら、冷房設備がなく、酷暑の時期を迎え、テントのなかは毎日蒸し風呂状態で、熱中症の危険に曝されているのだ。
「わざわざ首都圏島から救出しておきながら、放り出したまま、あとは知らない、勝手にせいだ。こんなことが許されると思うか」
斉木はくどくど説明をつづけ、最後に声を荒げる。
「……」
彼は「それはおれの台詞だ」と思いながら、斉木の豹変ぶりに驚き、黙って聴いていた。
「要するに、国には最初から住民が自主的に避難するのを待っていただけで、四〇〇〇万人を救済しようとする考えは全くなかったのだ」
斉木はまるで自分にとどめを刺すように言う。
「うむ……。分かった。白頭大人のお仲間さんたちを探せというんだな。で、いつまで……」
「明日にも出掛けたいそうだ。だが金も集めたいし、説明会も開かなければならないだろうし……。とにかく、忙しいんだ、オレは」
彼はなぜか斉木の声がウキウキしているように感じた。
避難民を救済するのもいいが、旧態依然とした社会システムを温存したままでは、救済も結果的に中途半端なものに終わらざるをえないだろう。新しいものをつくるなら、一度、古いものを徹底的に壊す必要があるのではないか。
そのとき、彼はふいに、斉木が官僚機構と訣別し、新しいシステムを模索しようとしているのだと感じた。
つぎの瞬間、彼の目に、首都圏島が一八〇〇万人の住民を抱えるように

して日本海溝へ向ってゆっくり滑り落ちていくのがはっきりと見えた。

# エピローグ

地球温暖化の果てに、列島首都沈没の不意打ちを食らったのは日本だけだった。

日本列島の本州から首都圏が広がる関東平野がもぎ取られ、「首都圏島」となって海上を漂い、やがて日本海溝へ没していったのだ。

首都圏島の出現は全く想定外だった。たとえこれを予測できたとしても、海溝への沈没と巨大津波の襲来は計算外だった。

超過密大都市圏である首都圏の沈没は二〇〇〇万人を超える犠牲者を出した。経済的被害も甚大を極め、世界第二の経済力を誇った日本のかつての姿はなかった。

東京沈下がはじまってから五年間、年々日本経済は下降線を辿ったが、首都圏島の沈没とそれにともなって発生した巨大津波で、日本は決定的なダメージを受けた。

東京がダメなら、大阪や名古屋があると言い、東京沈下以来、バカ張切り状態だったふたつの大都市が巨大津波で致命傷を被った。

巨大都市災害は巨大な被害を生むのだ。

途上国の経済発展、資源や環境制約下で、輸出に依存した外需頼りの経済運営は行き詰まりつつあるなかで、将来に対するなんらの構想もなく、国は大企業の言いなりに舵を切りつづけていた。

だがグローバリゼーションが進むなかで、新自由主義を標榜し、市場原理主義を信奉して、企業買収や株式の上場要請、外資や外国投資家の圧力、企業の短期的な利益最大化行動、株主の利益分配要求、長期的投資の制約、短期利潤最大化企業行動、投資家中心の規制緩和や規制撤廃、多国籍化、自国や自国民の利益を無視した企業活動が当り前のように跋扈していった。

しかし、グローバリゼーションは国をそして国民を搾取する構造にほかならなかった。

日本経済は大企業の戦略に翻弄され、大企業の身勝手な行動によって、いつの間にか、国も国民もぬけの殻になっていた。

このような状況のもとで、首都圏沈没と巨大津波に襲われ、日本は再起不能までに打ちのめされていったのだった。

これまでの行き方の見直しが迫られるなか、二〇〇〇万人を超える被災難民集団が日本列島を彷徨い出した。

（第一部　完）

（この物語はフィクションであり、登場する人物および団体名は実在するものと一切関係がありません。）

続地球温暖化の果てに第一部ー列島首都沈没
生野以久男
二〇〇九年六月一〇日第一版発行
（c）Ikuo Ikuno 2009
発行所　kinokopress.com
代表　森岡正博
所在地　大阪府堺市学園町一ー一　大阪府立大学人間社会学部
倫理学研究室内
連絡先　www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ
本文レイアウト＋デザイン　森岡正博

本書およびＰＤＦファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。
ＩＳＢＮ　なし